

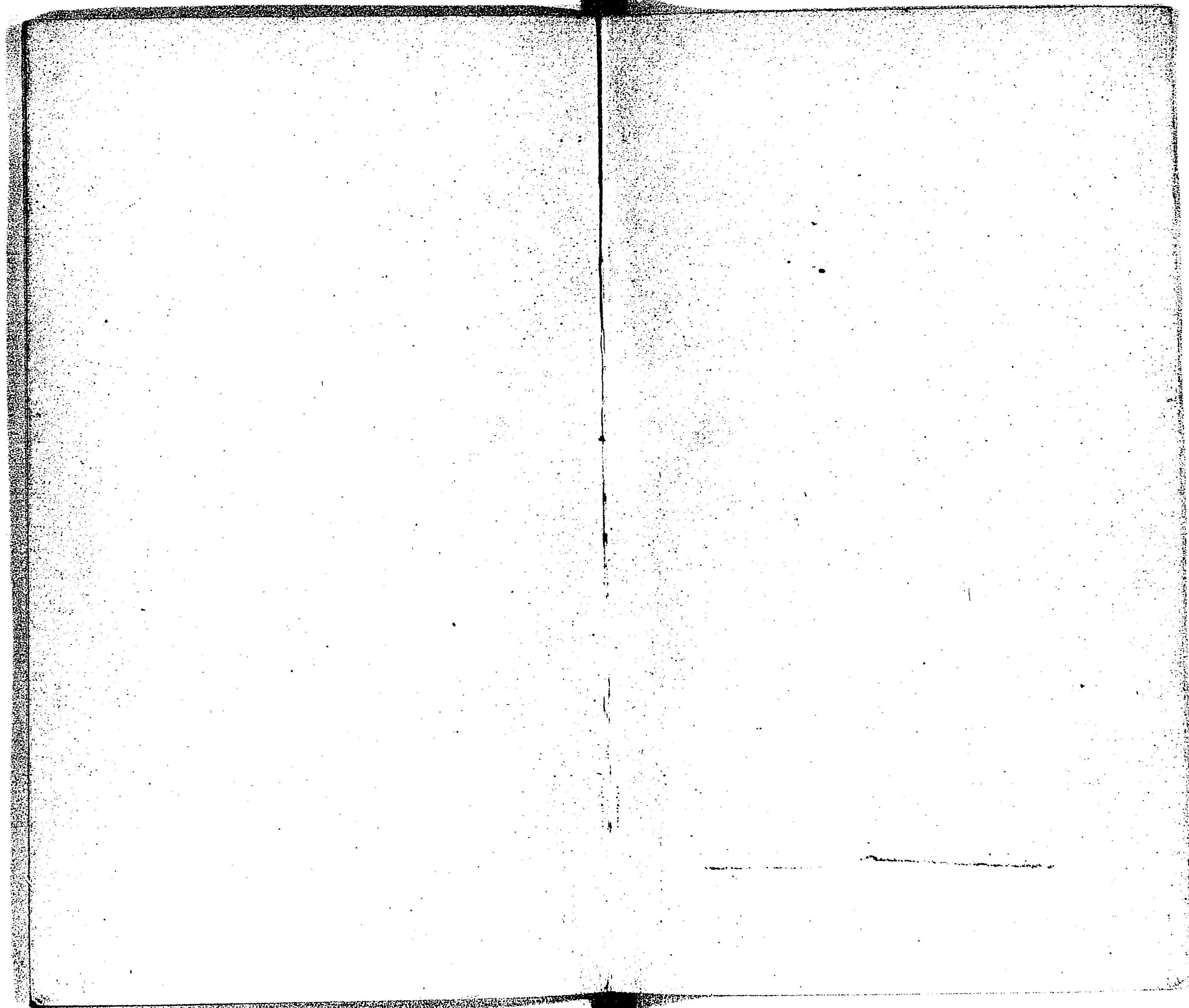
特 71

741

形如紅蓮花
大如掌

第三學年
用

270



國語研究會編纂



修正
中等國語讀本字解

第三學年用

編治
45. 5. 2
內交

特71
741

訂修 中等國語讀本字解 (卷五目次)

一、尊王論の起因……………	一
二、岩倉公の逸事(その一)……………	七
三、同(その二)……………	一五
四、先覺者……………	二一
五、ペリー紀念彰誼會に於ける演說……………	二五
六、母に上る……………	二八
七、ながれ木……………	二九
八、道話數則……………	三一
九、田舎と偉人……………	三三
一〇、旅況の古今……………	三五
一一、ヒマラヤ紀行(その一)……………	四〇
一二、同(その二)……………	四四
一三、望遠鏡と顯微鏡……………	四六
一四、座右の銘……………	四八
一五、蘆庵と君平(その一)……………	五〇
一六、同(その二)……………	五五
一七、岡井某に與ふ……………	六〇
一八、平等院の鳳凰堂……………	六二
一九、建武中興論……………	六五
二〇、芳野の行宮……………	七一
二一、閑日月……………	七九
二二、空行く雁(その一)……………	八二

二三、同 (その二) 八五
 二四、誠 八六
 二五、鹽原 八八
 二六、擴張せる日本 九三

二七、高田屋嘉兵衛 九四
 二八、荒井城址 九八
 二九、心育と體育 一〇〇

訂修 中等國語讀本字解 (卷五目次) 終

訂修 中等國語讀本卷五



尊王論の起因

- 【文教】ブンケウ 文事上のをしへ。
- 【地を拂ひ】チヲハラフ のこる所なきこと。
- 【武力】ブリキョク 兵力といふに同じ。
- 【権力】ケンリキョク 他をもしつけて服従せしむる力。
- 【變態に過ぎず】ヘンタイニスグヒ かたがかはつた

と云ふだけだ。

- 【正理】セイリ ただしき道理。
- 【辨へ】ワキマツ 分別すること。
- 【尊王斥覇】ソンノウウセキハ 天子をたつとび、大名頭たる幕府の政をしりぞける。
- 【當に然るべき所なり】マカニシヤルベキトコロナリ 當然にさうなるべきところだ。
- 【主として】シユ 第一番に。(もつぱら)。

【殺伐粗暴】 サツバツツバツ 人をきつたり、そこなつたり、するあらあらしさのこと。

【調和】 テウワ ほどよくとのへやはらげる。

【人道】 ジンダウ 人の踐み行ふべき道徳。

【根基】 コンキ ねもと、もとゐる。

【王朝の盛時】 テウテウ 天子の政をあそばしたる盛なる時代。(近江朝廷以來奈良朝時代をさす。)

【追懐】 ッキクワイ むかしをおもふ。

【武門政治】 ブモンセイザ 武家のまつりごと。

【抑壓】 ヨクアツ おさへつけ。

【屑しとせず】 1イギキョ 軽んじて意を加へざる貌。(汚らはしとす。)

【大日本史】 ダイニホンシ 神武天皇より、後小松天皇に至る間の、史實をかきたるもの。

【彰考館】 シヤウカウカン 小石川なる水戸藩邸にある、光圀の建てたまひし、修史館の名なり。

【知名】 チメイ 世に名のあらはれたる。

る。

【任に當る】 職務をひきうけて臨む。

【治亂興廢】 チランコウハイ 世の中の治まるのとみだると、をこるとすたること。

【春秋褒貶】 シュンシュウハクヘン 春秋は支那の魯の國の歴史にして、孔子の筆削にかかれり、上下の名分を明にし、周室を尊ぶの意を寓せり。この史上に於ける褒めたりおとしたり。

【微旨を寓し】 1ヒンゾウ 明かにせずして、かすかにほのめかしたる意味をもたせる。

【大義】 タイギ 君主又は國家に對する重大なる人倫のすぢみち。

【名分】 メイブン 君子父子の間に於ける、人倫上の分際。

【列傳】 レツテン 人々の傳記をつらねたるもの。(人一代の事蹟を記録するを傳と云ふ。)

【本紀】 ホンキ 帝王の一世の事を主として記したるもの。

【正統】セイトウ 正しき天子の系ケイ統トウ。

【君臣上下の分を正す】天子と臣民と上と下との分限を正して明にする。

【謹嚴】キンゲン つししみふかく、おごそかなること。

【筆法】ヒツポフ 筆のつかひ方。(かきぶり。)

【亂臣賊子】ランシンゾクシ 國家をみだす臣や、君父を賊コナふ反逆人。

【畏敬】キケイ おそれうやまふ。

【宮闕】キウケツ 禁裏のことなり。(宮城。)

【遺烈】キレツ のこれる功績。

【勤王説】キンノウセツ 天子の爲に勤勞すべしと云ふ説。

【系】ケイ 系統にて。すぢめ。

【水戸派】ミトハ 水戸風の學問の一派。

【流を汲む】リウヲキム 流儀をまなぶ。

【蕩然】タウゼン 水勢の大なるにいふ語(水の盛に流るゝ様な勢で。)

【根柢】コンテイ ねもと。

【刷新】サツシン 弊害をのぞき、事のありさまを新にすること。

【志氣を喚起せり】シキヲケンキセリ 物事をなさんとする意氣ごみをよびおこした。

【僧契沖】ソウケイチウ もと高野山の僧なり。國學に造詣ソウケイ深し。

【典籍】テンセキ しよせき。

【造詣】ソウケイ おく深く到達してまはめたること。

【古文辭】コブンジ 萬葉集もしくは、其以前にわたれる古代の文詞を云ふ。

【淳良】ジュンリヤウ 風俗の厚くしてすなほをること。

【儀表】ギヘウ のつとるべきてほん。

【國史律令】コクシリツリヤウ 我が國の歴史刑律及び諸般の命令。

【制度習俗】セイドシウソク さだめられたる法律及びならはし。

【國民の特性】コクミンノトクセイ 國民の特別なる性格。

【闡明】センメイ かくれたる道理をあきらかにする。

【見地】ケンチ みどころ。(目のつけばしよ。)

【因を成す】原因をつくる。

【帷を垂る】塾をひらきて、學問を教授すること。(支那漢の董仲舒が、博士となりて書を講ずるに、常に「とばり」を下して、三年園を見なかつたと云ふ故事にもとづくなり。)

【風靡】フワビ 靡さはせること。

【内外本末の序】日本國と外國と、日本をもととして、外國を末とす

べきしだい。

【墜緒を尋ね】地におちてすたれたる、上古の風のいとぐちをもとめて、古の道をさがす。

【恢復】クワイフク おほいにあとへひきもどす。

【古學】コガク 古代の事を研究する學問。(本居宣長の學派。)

【古傳】コデン いにしへのいひつたへ。

【天皇神權】テンソウシンケン 天子の政治上に於ける權力は、神より授

はじめる。

二 岩倉公の逸事

【月日の小車】小は接頭的美稱にして、月日のめぐるより、車になぞらへて云へるなり。(めぐりめぐれる月日の意。)

【故古府公】コウフコウ 既になくなられた、右大臣岩倉具視公のことなり。(右府は右大臣のことなり) 【富嶽のやすさ】富嶽のうごかざる如くに。

かりたる權力にして、即ち神の權威なりとの説。

【名實】メイジツ 名分の上のみならず事實上に於てもこの意。

【頭腦】ツノウ あたまのなか。

【新史學】シンシガク あたらしき歴史上の學問。(大日本史を指す。)

【勃興】ボツコウ さかんにおこりたつ。 【古典學】コテンガク 古の事をしてしきたる書籍を研究する學。

【主唱】シュンシャウ もつばらとなへ

【置かてやは】おかないておかう

か。

【さほみなき後の世】幾万年もはてしなき後代。

【逸事】イツジ 散逸して、あまねく

世人に知られざる事實。

【後の世の鑑】後代のでほん。

【史人の料】歴史家の材料。

【神武の古に復る】神武天皇時代の王政政治の状態にひきもどして政を行ふ。

【大義を定む】君臣の間のおほいな

るすぢみちをさだめる。

【輔翼】ホヨク たすくること。

【碩學】セキガク 碩は大なり、大學者の意。

【野々口隆正】ノノグチタカマサ 石見の人、平田篤胤の門人なり。

【中興】チュウコウ 盛におこる運にあたるといふこと。

【振はず】さかんにならない。

【搢紳】シンシン 搢ははさむ、紳は大帯なり。笏を大帯にはさむより公卿のことに用ゐる語。

【御おぼえめてたかり】御信用が、

他にすぐれてあつかつた。

【所見】シヨケン 目のつけどころ。

(みこみ。)

【延喜天曆の跡に復る】醍醐、村上の兩帝の治世のさまにひきもどす。(即ち武家政治を廢して、公卿政治の状態にかへるを云ふ。)

【公家】タゲ 朝廷を云ふ。

【武家】ブケ 武士の家、即ち幕府

をさす。

【隙を生ず】ひなからひのわるくな

ること。

【有識の家】朝廷及び武家の禮式典故を講究する家。

【生ひ立ち】オヒタチ そだつ。

【大勢を達觀す】時世のおもひく、あらましのさまをみとらす。

【公武】コウブ 公家と武家と。

【看破】カンパ みやぶる。(みぬく。)

【人あり】先見の明あるすぐれた人物。

【百揆庶政】ヒヤクケキシヨセイ 百事をとりはかる政務官のするもろもろ

の政。(或は百官の庶政。)

【原動力】 ゲンドウリョク さまさまの
はたらきをなす、原となるべき
力。

【盤根錯節】 バンコンサクセツ わだか
まれる根、いりみだれたるふしと
云ふことにて、物事のいりくんで
險難なるに云ふ語。

【破竹の勢】 竹をわるに、始めの一
節をわれれば、他は刀をむかへずし
て割るゝが如く、力を勞せずして
解決するを云ふ。

【思ふらめ】 思ふてあらう。

【心ある人】 思慮深き人。

【天平以來の宿弊】 天平は聖武大皇
時代の年號なり。此の時代よりこ
のかた、政權の漸く下にうつりた
る、久しい間の弊害。

【破りがたきを破る】 うちこはすこ
との、容易でないのをうちこは
す。

【大政を返上】 徳川慶喜、慶應三年
十月十四日に、上奏して政權を朝
廷に返上せしを指す。

【謹を蒙り】 謹責を受けける。(公武合
體、和宮降嫁の件に關し、籠居落
飾の命を蒙れるを云ふ。)

【蟄居】 チツキヨ かくれこもりて居
ること。

【天日をも見給はざりし】 陛下の御
前に出ることの、かなはざりしを
云ふ。

【玉松操】 タママツミサヲ 京都の勤王
家にして、山本毅軒を號せり、後
姓を玉松と改む、隆正の門人な
り。

【起草】 キサウ 草稿を書き起すこ
と。

【經綸】 ケイリン 經は經緯の經にし
て「たて」なり、綸は綱なり、物を
組織する意より轉じて「國家を治
む」と云ふ意に用ゐる。

【策案】 サクアン はかりごとのした
しらべ。(單にはかりごとの意に
も)。)

【物論紛紛】 ブツロンフンブン 世論のや
かましさのこと。

【責に當り】 責任の地に立つ。

【從容應答】 ショウウヨウオウタフ ゆつたりと、せまらずしてうけたへをする。

【雄藩の主】 大大名の主にて、薩長

土肥などの強大なる藩侯をさす。

【容を改む】 居ずまゐをなほす。

【朝議】 チャウギ 朝廷の論議。

【大令一度發し】 慶應三年十二月往

政復古の大令の下りたるをいふ。

【攝關】 セツカン 攝政關白。

【議奏】 ギソウ 天子の近習に侍りて

諸の御用を辨し、傳奏より奏する

事は、議奏まづこれを受けて後に奏す。後鳥羽天皇の時頼朝の請によりておかれたり。(奏請することを議する意。)

【傳奏】 テンソウ 古昔禁裏にて、武家諸社諸寺等よりの奏聞を傳達せし職なり。寺社武家何れにも皆あり。天皇の傳奏は後醍醐天皇之れをおき給ひしなり。(とりつぎて奏聞する意。)

【洪圖】 コウト 大計といふに同じ。

【旬日】 ジュンジツ 十日間といふこ

と。

【基礎】 キツ どだい。

【禁闔】 キンコン 禁中の鴨居を云

ふ。

【達文】 タツブン 布達文。

【女房】 ニョウバウ 尙侍以下禁中の

女中を稱する語。

【請謁】 セイエツ 目見えを請うて物

をたのみこむこと。

【宿弊】 シユクヘイ 古き害悪の義。

【晩年】 バンネン 年を取りて後。

【この一事】 宮中府中の別を立てら

れたる一つの事。

【扇の要】 アフギカサメ 萬事に重要な根本の

意。

【知る人ぞ知る】 岩倉公の心事を知つてをるものは、承知して居る。

【偉丈夫】 キジャウフ 世に傑出したる

人。(大人物。)

【畫策】 クワクサク 謀をたてる。

【履歴】 リレキ 一代の由緒來歴の

義。

【功績】 コウセキ いさをし。

【空しくなせそ】 そのまゝにしてあ

とかたなしにはするな。

【かたりつぎの料】後の世に云ひつたふる材料。

【おのれの功を推し】自分の功を推しやりて。

【大臣としていとめてたし】大臣としては、其所作がりつばだ。

【断然】ダンセン おもひきつて。

【國是】コクゼ 一國の衆論のみとめて是とする國政の方針。

【姦雄】カンユウ 姦智ある英雄の意。

【誤られたり】自分の身をしくじらされた。

【隠戸】カクシド ちよつと見て、見知られぬ様に造りたる戸。

【大久保】オホクホ 名は利通、甲東と號す、薩摩の人なり。

【木戸】キド 名は孝允、松菊と號す、長門の人なり。

【小松】コマツ 名は帶刀、薩摩の人なり。

【廣澤】ヒロサハ 名は眞臣、長門の人なり。

【鎖國】サコク 外人を斥けて、開港を非とすること。

【口惜し】くやししく思ふこと。

三 岩倉公の逸事

その二

【剛膽】ガウタン 心づよく、膽力のすわりたるを云ふ。

【要徳】エウトク たいせつなる徳。

【長袖の人とも覺えぬ】公卿の人ともおもはれない。

【剛毅】ガウキ 強堅不屈なるをい

ふ。

【蕭牆の内】かきの内といふことにて、國內と云はんが如し。(うち

は。)

【軍刀】ケンタウ 戦陣に用ゐる刀。

【家の侍】サムライ 家につかへてをる武士。

【あはや】物のまさに發せんとする時に發する聲。(ああはや。にて、

今にもこの意。)

【手に汗を握る】きけんに思つていらだつこと。

【自若】ジジャク 泰然として、精神

態度の常の如くにてかはらざる
貌。

【動ずる色】^{ドウ}さわぎたてる色。

【座を守る】自分の座して居るところを動かずして、落付いて居ること。

【畏さ^{カシコキ}あたり】宮中をいふ。(天子のことわれをおきて人はあらし。自分をおさしおいて、他に人はあるまじ。

【明き心】かくすところなき赤心。

【君臣水魚】^{クニシンスキギヨ}君臣相

親むこと。(諸葛孔明傳に、「孤之有孔明、猶魚之有水云々。」とあるによる。)

【雲の上】禁中のこと。

【かしこければ洩しつ】畏れ多いから、かきもらした。

【心交】^{シンカウ}心からの交。

【密々の往復】^{ヒツミツ}ないないのゆきき。

【心もとなし】不安心。(きづかはし。

【守衛】^{シユエイ}身をまもる。

【契り給ふ】^{チギ}約束したまふ。

【遭難】^{ソウナン}災難にあふ。

【創業撥亂】^{サウゲフハツラン}業をはじめめて、亂れたる世を治むる。

【内治を整理し】國內の政治をととのへをさむる。

【計畫】^{ケイクワク}もくろみをたてる。

【料らずも】^{ハカ}おもひもよらず。

【かたみの言葉】思ひ出の種となるべき言葉。

【國體】^{コクタイ}國を組織する主權の存在する所によりて、觀察した

る稱。(くにぶり。)

【宮内省】^{クナイシヤウ}宮廷に關する一切の事を取扱ふ役所。

【皇祖皇宗】^{クワウツクワウツク}皇室の御先祖、及び天子の代々の祖。

【はからひ】處置。(とりさばき。)

【輔弼】^{ホヒツ}天子をたすくること。

【心を竭す】^{ツク}心のあらん限りをあけて力をいれる。

【儉約を旨とす】儉約を趣意とする。

【臺鼎ダイテイの高き位】太政大臣、左大臣、右大臣を、三公とも三臺とも云ふ。岩倉公時に右大臣なりしを以ていへるなり。(大臣の高き位の意。)

【公達】キンダチ 大臣家の子息の稱。

【家範】カハン 家の内の定。(家憲、家法。)

【守文】マモリフミ わが身を守る書まももの。

【附録】フロク 主たる書きものに

附けたる記録。

【奢侈】シヤシ 身の分限にこえて物事にぜいたくなること。

【遊惰】イウダ あそんでのらくらすること。

【侍サツラ人】御側に居る人。

【案文】アンモン したがき。(草稿。)

【今イマはの際】今にも死せんとするとき。臨終の際。(

【遺言】キゴン 臨終にのこす言葉。
【準ナツラへ】ならつて同じ様にせよ。
「ゆるごん。」)

【心を倅サシき】心をさまざまにくるしむる。

【代筆】ダイヒツ かはつて筆をとる。

【何となく】何くれとなく。

【あらららん後の世】死にたらん後の世。

【心づくし】心の限りをつくして思ふこと。(心配。)

【節節】フシフシ こゝかしこの箇條々々。

【ちりともとの歌】何の役にも立た

ないであらうけれども、それでも若しやと思つてかき集めておいた、浦の藻鹽草を、誰が浦においていつて荷ひあげて持ち運ぶであらう。自分の天下國家のためと思つてなさんとして計畫しておいた事を、誰が其の任に代りてつくすであらうか。

【もしほ草】もしほを採るに用ゐる海草。(藻に水をかけて鹽分をふくませ、鹽を取る料にする海草。)

【節操】セツソウ 心のまもり。(みさ

を。

【晩節】 バンゼツ 晩年の節操の意。

【標準】 ヘウジユン めあてとすべき正しさのり。

【辭表】 ジヘウ 辭職願のこと。

【同僚】 ドウレイ 同役の人。

【諸卿】 シヨキョウ 大臣がた。

【歎き請ひ】 タンギ 歎願する。

【上】 カミ 主上をさす。

【意ばへ】 イバヘ 心のさま。 イチユウ 意衷。

【斟ませ給ひ】 シンサイ 御斟酌あらせらる。

【さしもに】 それほどに。

【重り衾】 オモシ おもき布團。

【召し集へ】 ツド よびあつめる。

【杯まのれ】 酒をのめ。

【事重らせ給ひ】 オモシ 御病氣がおもくおなりあそばした。

【かひなき】 カヒナキ せんかたなし。

【夢現】 ユメウツ、ゆめのまにも、目のさめて居る間にも。

【おほやげの事】 國家に關すること。

【亡からん後の事】 ナシ おかくれなされ

たてあらう後の事。

【雲の上】 クモノウエ おかみをさす。

【聞えあげ】 キコエアゲ 奏上。

【本末の序】 ホンマツノジヨ もととすゑとの順序。

【思ひいづるまゝに】 オモヒ 思ひ出すに従つて。

【あはれ】 アハレ さても。

【この文讀まん人々】 コノフミヤマンリノヒト 此の文をよむであらう人たち。

【亡き人】 ナシノヒト 右大臣具視公をさす。

【かきやりつる】 カキヤリツル かきあつめておいた。

【藻鹽草】 モシホクサ 文書をさす。

【いや繼々に】 イヤツグツグ いやが上につぎつぎて後世まで。

【かつぎあげべき】 カツギアゲベキ 擔ぎあげて用ゐる。 ト とりあげ用ゐる。

【丈夫の伴】 マシラナ ものゝふたらのともがら。

【地下の靈】 リヤウ 地下にまします靈魂。

【慰めよや】 ナグサメヨヤ やすめまゐらせよ。

四 先覺者

【習慣】 シウクワン 世のならはし。

【新路】 シンロ 新しき議論を唱へ

て、それを進めて行くべき道。

【障礙百出】 シヤウカイヒョクシニツ

はりがさまざまに出る。

【覺悟】 カクゴ 心がまへをする。

【千辛萬苦】 センシンバンク ちんじんま

に艱難苦痛を受くること。

【幾多】 イクダ どれほどか。

【生死の境】 死ぬるか生きるかのさ

かひ目。

【間髪を容れず】 毛髪一筋さへ容る

ゝすきがないほどに間隙なさを

云ふ語。

【時論】 ツロン 其の時代の輿論。

【主義】 シユギ 執り守る一定の方針

【ルーテル】 西紀千四百八十三年、

「イスレーヘン」に生れたる鑛夫

の子にして、「エルフルト」大學に

學び、後「ウイッテンベルク」大學

の教授となり、神學博士となり、

基督新教の分立を稱へたる人な

り。

【親鸞】 シンラウ 浄土真宗の開祖に

して慈鎮上人の弟子なり。

【日蓮】 ニチレン 法華宗の一派を開

きたる人なり。

【泰西】 タイセイ 西洋のこと。

【文物】 ブンブツ 文化に關するも

の。

【先輩】 センバイ 年齒、學藝等の、己

より先に進んだる人。

【心を寒からしむ】 恐れて戰慄せし

むるを云ふ。

【凌辱を受く】 人よりあしつつけられ

てはづかしめらるゝこと。

【甘んず】 こゝろに足れりとするこ

と。

【異端】 イタン こゝにては武士道の

害となるべきものもの、即ち泰西

の學問をさせるなり(論語に「攻

乎異端、斯害也己。」とあり。)

【夷狄の學】 野蠻人の學問。

【蔑視】 ベツシ さげすみ視る。

【風俗】 フウゾク てぶり又はみな

り。

【心血をばく】 心のそこより出づる

血をばく。(辛苦の甚しきに云ふ。

【赫々】 カクカク きら／＼とあきら

かなること。

【ちひちひに】次第次第に。

【看破】カンバ 見あらはす。

【一般】イツメン おしなべての人。

【對照】タイセウ てりあはせて見
る。

【俗をおどろかす】時代の一般の人
をおどろかす。

【風潮】フウテフ 風に従ふ潮の流れ
と云ふことにて、時勢のおもむく
ありさまの意。

【萃^{アツマ}り】聚るなり。

て自殺す。

【荆棘叢中】ケイキョクサウチュウ いば
らのむれの中。

【僥倖】ケウカウ こぼれさいはす。

【日月と光を争ふ】其功績の偉大な
ること、日月のひかり輝くが如し
と云ふこと。

【陳腐】チンプ ふるくさきこと。

【誇張】コチャウ 誇大して云ひはる。
(實際より仰山^{ギヤウサン}に云ひたてる。)

【世と共に浮沈す】自ら守るところ
なく、世の變遷につれてゆくを云

【物論洶洶】ブツロンキョウク 世論
のわきあがるが如く、喧しく騒ぎ
立ること。

【禍^{ワガハヒカモ}を醸し】不幸をこしらへ出す。

【渡邊華山】ワタナベクワザン 佐藤一
齋に従ひて文學を修め、又蘭學に
通じ、畫をよくす、攘夷の非なる
を論じ、幕府の忌諱^{キキ}にふれ罪せら
れて死す。

【高野長英】タカノチャウエイ 陸前の
人、蘭醫なり。夢物語を著し外國
の形勢を論じ、幕府の忌諱^{キキ}を受け

【碩學鴻儒】セキガクコウジュ 大學者
と云ふこと。(碩も鴻も大いなりと
云ふ意なり。)

五 ベリー記念彰誼 會における演説

【團體】ダンタイ 協同して集りたる
一つの組合。

【彰誼會】シヤウギクウイ 好誼をあら
はす會。(誼はよしみと訓す。)

【謝意を表す】御禮の意をあらはす。

【披露】 ヒロウ 公然とひろめをする。

【嚴肅】 ゲンシユク おごそかなること。

と。

【機會】 キクワイ よきあり。

【光榮】 クワウエイ はえ。

【長夜の眠を覺され】 夜のあけて後

までも寢て居る夢をさまたされた。

【流石の】 日出づる國として、第一等の

國と思つて居つたそれほどの。

【自覺】 ジカク みづからさとする。

【方針】 ホウシン すゝんで行く一定

の方向。

【締結】 テイケツ むすぶ。

【布教】 フケフ 教義をひろむること。

【昌平賢】 ショウヘイコウ 徳川綱吉の

建てたる處、幕府の漢學校なり。

【顧問】 コモン 意見を問うて、相談相

手にすること。

【傳導師】 デンダウシ 教旨をつたへひ

ろむる人。

【盡瘁】 ジンヌキ 瘁は勞なり、心力を

盡し勞する義。(力をつくす。)

【根帯】 コンタイ ねもと。

【服膺】 フクヨウ 膺は胸なり、胸にあ

て、忘れざること。

【友誼的助言】 イウギテキチヨゴン 朋友

間のよしみ同様の傍より添へる言

葉。

【人道的精神】 ジンドウテキセイシン 神

道を旨とする精神。人類の幸福を

増進するを以て旨とする精神。

【特質】 トクシツ 特別なる性質。

【滿腔の同情】 胸一ぱいのおもひや

り。

【貢獻】 コウケン 力を致すこと。

【懇切周到】 コンセツシウタウ ねんご

ろに、あまねくゆきわたる。

【鞠育】 キクイク もりをたてる。

【干戈相見ゆ】 たてほこを取りて、互

に顔をあはす。(戦端を開くこと。)

【勃興】 ボツコウ 急におこりたつ。

【觀念】 クワンネン おもひつめて居る

心。

【反射】 ハンシヤ てりかへし。

【先進國に負ふ所】 我國より先きに、

文明に達して居る國に對して、せ

負つて立つ。

【感化力】 カンクワリョク 心に感じて

善き方面に、うつらしむる力。

【發展】ハツテン のびひろがる。

【間接】カンセツ ぢかづけならざる。

(間に或物を隔て、他に對する語。)

【微意】ビイ いさゝかなる志。(謙遜したる詞。)

【代表者】ダイヒヤウシヤ 他にかはりて表にたつて居る人。

六 母に上る

【達者】タツシヤ 壯健なること。

【渡來の船】米國より來れる船のこと。

【七の時】今の午後四時頃のこと(午前にも云ふ。)

【沙汰】サタ ひやうばん。

【見侮】ミアナドリ 人を見さげること(馬鹿にして居ること。)

【悠悠見物】イウイウケンブツ ゆるやかに見物すること。

【傍若無人】バウザクアジン 眼中に人無きが如く振れ舞ふこと。(人もなげなるふるまひ。)

【奉行】フギヤウ 浦賀奉行のこと。(船舶出入の検査役人。)

【與力同心】ヨリキドウシン 與力は奉行の配下において同心を指揮する役にして、同心は罪人逮捕のことにあづかる役なり。

【上】カミ 幕府をさす。

【趣意】シユイ 意見。

【公邊】コウヘン 官府といふこと。

【拶挨】アイサツ うけたたへ。

【盆前】ボンマヘ 七月十五日の盂蘭盆會前と云ふこと。

【罷り歸り】引きあげてかへる。

【穿鑿】センサク うがつて、物をしらべること。

【附人】ツキビト ついて來た人。

七 ながれ木

【ながれ木の云々】春日雪どけ雨などにて、川には水がまして、上流より流れて來た流木などが、だぶたぶと岸にうちつけて居るのが、如何にものだかなるさまに見やらるゝとなり。

【ならび立つ云々】「鐘つき堂や、太鼓やぐらなどが、並び立つて居るあたりに。春風が駘蕩として吹いて居る。」と云ふ意。

【武藏野や云々】武藏野は、古來月の人るべき山もなし。」とまで歌はれたる程の廣漠なる野原なるが、今やさみだれ時にて、水田には水満ちたれば、どこを見ても、さみだれの雲のうつつてゐない處はなく遠くのはては、水天彷彿のさまである。

【鹿鳴いて云々】古昔獵人が、夏の頃、火串に松をもやして鹿をよせ、これを射たりしとあり。今奈良に來て、鹿の鳴いて居るのを見、かつは麓の燈火を見て、此の傳説が思ひ出さるゝとなり、(火串は松明をはさむ木なり。)

【牛ひとつ云々】歸牛牽々として、夕陽山麓を照せるを、山上には、いまや時雨が降つて居る。」と云ふ意なり。

【みづらみの云々】落葉繽紛として

湖上に錦をひるかへせるさまをうつせるなり。

八 道話數則

【佛家】 フツケ 佛敎家の意。(僧侶。)

【知識】 チンキ さとりを開ける明僧のこと。

【世をはなれ】 俗人の世界と、交際をたつこと。

【欲をすてたる】 人欲をすて、悟の道に入ること。

【凡俗】 ボンゾク 凡と書きたるはあ

し。世上の俗人を云ふ。

【教義】 ケウギ をしへの主意。(宗教の旨義。)

【私欲一偏に著す】 おのれの欲一偏張に執着する。

【中庸を貴ぶ】 偏頗なく、過不足なく中正の道を得るのを第一とする。

【輪轉】 リンテン まはりめぐる。

【天理に順ひて種を蒔き】 種をまけば芽を生じ、生長して花實を結ぶは、天地自然の道理なり。此の理法に従ひて種をおろすを云ふ。

【天理に逆ひて草を取る】草木の種をまけば生長し、花實を結ぶべき善の自然の理を順用せず此の理法に反して、發生せしめざる様に雑草をぬき去るを云ふ。

【欲に随ひて家業をはげみ】ものれの私欲に克つて禮にかへるは、天理の順なるべきに、此の理法に反して、私欲を充さんがために家業をはげみて、生産に従事するを云ふ。

【欲を制して義務を思ふ】されど私

欲を恣にするときは、所謂奪はずんばあかざるに至るべければ一方に私欲を充すと共に、他に對しては適當に制欲を加へて、他人につくすべき務を思ふべしとなり。

【平等均一】ヒウドウキンイツ 不同差別なく一様なること。

【俗言】ツクゲン 世の中の一般に用ゐるいひならはし。

【乗合】ノリアヒ 多人數共に乗ること。

【一心協力】イツシンケフリョク 心をひ

とつにし、力をあはせて。

【上荷をぬ】^{ウヘニ} 上の方にある荷を取りすつること。

【至愚】シクきはめたるちろかももの。

【至誠神の如し】「まごころをこめて事をつとむれば、神域^{シンキキ}に至るべくして、物事の眞に通ぜざる處なし。」との意なり。

九 田舎と偉人

【隴畝の間】^{ロウホ} うねあぜと云ふことにて、農民の間の義。

【崛起】^{クツキ} にはかにおこりたつ。

【篤論】^{トクロン} 篤實なる論。

【一世を動す】 時代の人を自由にする。

【名を當代に擅にす】^{ホシイマイ} その時代におもふまゝに名を高くする。

【後昆に垂る】^{ゴウコン} 昆も後なり、後世にのこす義。

【村閭】^{ソンリョ} ひらびと。

【雄飛】^{ユウヒ} 他をおしつけて巾をさかすこと。(勢盛に奮起すること。)

【畢世】 ヒツセイ 一生涯。

こと。

【醒覷】 アクサク 小事にかゝつらひて、しきりにつとむること。(あくせく。)

【宏大雄壯】 クワウダイユウサウ おほきく、をしくしてさかんなること。

【旺盛】 ワウセイ さかんなること。

【都門】 トモン みやこの地。

【郊外】 カウケライ 城下はづれの野外。

【屏息】 ハイソク ちびこまつて、いへの内ばかりにをること。

【散策】 サンサク こゝかしこに、そゞろあるきすること。

【狹隘】 クワアイ せまくるしい。

【天朗なる時】 ホガラカ そらのすみわたつた時。

【宇宙】 ウチウ 天地間といふに同じ。

【紛紛囂囂】 フンブンガウガウ ごとごとして、さわがしきこと。

【窄小】 サクセウ せまく小なること。

【活潑清澄】 クワツバツセイチヨウ いきいきして威勢よく、すがすがしき

いさして威勢よく、すがすがしき

【涵養】 カンヤウ 漸ゼンをおひて、自然に

【山徑欹危】 サンケイイキ 山道の、かたむきして、あやうきところ。(敬は

しみるやうに養ひなす。

敬の誤ならん。)

【山高く水長く】 高山長江の意。

【萬境】 バンキヤウ すべてののさかひ。

【細棧】 サイサン ほそきかけはし。

【血氣】 ケツキ はやりぎ。(激ゲキしやす

【岩もる水を掬す】 岩の間より流れ出づる水をすくふ。

マ心。)

【故山に歸る】 故郷に歸る。

【渴を醫す】 カツ かはきをとめる。

【機曾】 キクワイ よさばあい。(をり)

【務めて試む】 むりにでもやつて見る。

【迂迴】 ウクワイ まはりみち。

【逍遙】 セウエウ こゝかしこあるさまはる。

まはる。

一〇 旅況の古今

【孤枕】 コチン ひとりねの枕。

【將軍宣下】 シヤウケンセンゲ 武將が、

征夷大將軍に任せらるゝ宣旨を、
朝廷より下さるゝを云ふ。(宣旨は
敕旨を宣傳するの義なり。)

勞をも知らずして來たわい、さて
もありがたひ御代じや。」と云ふ意
なり。

【救使】 チヨクシ 救命を傳ふる使者。

【衾裯】 キンチウ フトンの類を云ふ。

(天使。)

【竹添井井】 タケゾヘセイセイ 竹添進
一郎氏のことなり。

【公卿】 クゲ 殿上に伺候する官人。
(大臣、參議、納言などの稱。)

【蜀】 シヨク 今の四川省なり。

【君が代は、うまやうまやにの歌】 う
まやは驛場なり。さて意義は、「君
が代は、宿場々々に旅の宿をとり
て、昔は草をむすんで枕として、
野に假寝したと云ふが、そんな苦

【紀行】 キカウ 道中日記なり。

【長安】 チャウアン 今の陝西省西安府
なり。

【臥房】 カッパウ ねるべきへや。

【禹域】 ウキキ 支那の異稱なり。

【得涉遠】 トホキニワタルコト 遠方に
行くことが出来る。

【儼】 カリ 賃してかることなり。

【廁資】 シトウ かはや。

【準ず】 ナゾラフ。(準據。)

【矢豚柵】 トンサクニシス 豚をかひ
おく柵中に放失するなり。(矢は糞
溺の稱。)

【軍防令】 カンパウレイ 大寶令中の軍
防令をさせるなり。軍人防人に關
する條項を定めたるなり。(凡兵
士、人別備備六斗鹽二升、并當火
供行戒具等、並貯當色庫。」とあ
り。)

【旅況】 リヨキヤウ たびのありさま。

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【往時】 ヲウジ むかし。

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【刺客】 シカク 暗殺を行ふ人を云ふ。

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【麥隴】 バクロウ 麥畑のことなり。

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【家にあればの歌】 「家にあれば、食

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【家にあればの歌】 「家にあれば、食

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【家にあればの歌】 「家にあれば、食

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【家にあればの歌】 「家にあれば、食

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【家にあればの歌】 「家にあれば、食

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【家にあればの歌】 「家にあれば、食

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

【家にあればの歌】 「家にあれば、食

【伊勢物語】 イセモノガタリ 歌集の
物語にして、和歌より趣向を案出

して、在原業平の事を傳記やうに構成したる物語なり。

【涙を糍の上に云々】 伊勢物語に、在原業平が友一人二人誘ひて、あづまの方へ行きける道すがら、三河國八つ橋のあたりにて、かさつばたを見て、都の妻をしのび「から衣きつゝなれにしましあればはるくゝ來ぬるたびをしぞ思ふ。」の歌をよみたる條に「みな人かれひのうへに涙おとして、ほとびにけりとあり。」これをさせるなり。

【太平記云々】 タイヘイキウモン 俊基 關東下向の條に、「日すでに亭午なれば、饑進らするほどにて、輿を庭前に止む。」とあるを指せるなり。【饑を進む】 かねいひをさしあげる意。

【適千里者三月聚糧】 センリニユクモ ノハ、サンゲツリヤウヲタクハフ 莊子に「適百里者宿春糧、適千里者三月聚糧」とあり。千里の遠きにゆくものは三月の糧を用意せよとなり。【柳菴雜筆】 リウアンザツビツ 栗原信

充の著にして、考證を主とせる雜録なり。

【贊川驛】 ニベカハエキ 東筑摩郡にあり。

【宿帳】 ヤドチャウ やどやの帳簿を云ふ。

【御糍ほとばし過し云々】 ほとばすは糍を湯にひたすことなり。慶長の頃の旅行は、一人一日糍二合五勺をあて、旅行に要するだけをもたらして、旅店に泊り、みづからその糍をほとばして食ふならひな

るを、或は旅舎に依頼してほとばさしむるときは、過量にほとばしてこれを掠むることあるを以てかく記しおけるなり。

【夜の物云々】 はじめに依頼せしより多くは受け合ひ申さずといふ意なり。夜のものは夜具を云ふ。先觸とは豫て通告することなり。

【令條記】 リヤウテウキ 徳川時代の令條をあつめたる書なり。

【上洛】 ジヤウラク 京都にのぼるをいふ。

【路次中】 ロジチウ みちすがら。(道中。)

の義。

【人に四文馬に入文】 元和三年の幕

【劇場】 ゲキヂヤウ しばるば。

府の令に曰く、「東海道驛々の木錢

【宮本武藏】 ミヤモトムサシ 二天齋と

は、一人毎に京錢四文、馬一匹毎

號す、劔道二刀流の達人なり。

に入文たるべし、もし旅人薪をも

【遺風】 キフウ のこつてをる風俗。

たらして之れを用るれば、木錢は

【六十六部】 ロクジュフロクブ 行脚僧が

その半價たるべし。」云々とあり。

法華經を六十六國の神佛の靈地に

【木賃】 キチン たきぎをたく賃の意。

納むることあり。この行脚僧を六

【故老】 コラウ 老人の意。

十六部と云ふ。

【露宿】 ロシユク 野宿すること。

一一 ヒマラヤ紀行

【逆旅】 ゲキリヨ 旅客を迎ふる旅館

(其の一)

【海拔】 カイバツ 山嶽などの海面よ

界。

り高くぬき出てたる差異。

【下瞰】 ゲカン したを見おろす。

【餘脈】 ヨミヤク わかれた山脈。

【秘密國】 ヒミツコク ひめかくして公

【本系】 ホンケイ もとの山脈。

にせざる國。

【障壁】 シヤウヘキ しきりのかき。

【包擁】 ハウヨウ ひつくるんでをる

【豊饒】 ホウゼウ ゆたかに肥えたる

こと。

こと。

【雄宕】 ユウタク 常のものより度を

【千古、萬古】 センコ、バンコ 千年も萬

こえて、をいしきこと。

年もの意。

【夢想する能はず】 ゆめにもおもひ

【依然】 イゼン もとのまゝといふ意。

見ることが出来ない。

【壯容】 サウヨウ 壯大なるすがた。

【舷頭】 ゲントウ ふなばた。

【下界】 ゲカイ 人間の住んでをる世

【晚暉】バンキ 夕日を云ふ。(輝とあ

るは暉の誤ならん。

【微塵砂】 ミチンシヤ きはめてこまか
さ砂。

【模糊】 モコ 物のはつきりせずして
廣き貌。

【生暖き風】 ナマアタカ 少しばかり、あたゝか
し風。

【亡國の恨】 國のほろびたるを残念
に思ふこと。

【知らず顔】 しらない顔付。(平氣。)

【蠻歌】 バンカ 野蠻人の歌。

【悲愴】 ヒサウ かなしみいたむ。

【清懷】 ジャウクワイ おもひ。

【睡眠客車】 スキミンカクシヤ 寢臺客
車のこと。

【經營】 ケイエイ 基礎をたて、物事
ををさめいとなむこと。

【重疊】 チャウテウ しくへにもかさ
なる。

【蜿蜒】 エンエン 蛇のはふ如くに、う
ねうねすること。

【突兀】 トッコツ 突は出づるなり、兀
は高さなり(高くつき出てをる。)

【臆病】 オクビヤウ おぢおそれて用心

すること。

【峯腰】 ホウエウ 山の中腹。

【巒巔】 ランテン やまのいたゞき。

【千古の森林】 千年も経たらん森。

【萬丈の絶壁】 萬丈もあらうほどの
極めてはげしさがけ。

【鼓動】 コドウ どきどきうごくこと。

【雙脚】 サウキヤク 兩方の足。

【戰慄】 センリツ がたがたふるふこ
と。(をのゝきおそるゝ。)

【煩蒸】 ハンジヤウ むしあつきこと。

【外套】 カライダウ 上衣の上にきる表

衣。

【白皚皚】 ハクガイガイ まつしろきこ
と。

【雲海】 ウンカイ 自分の身は既に雲
の上に居る故に、脚下の雲を海に
たとへしなり。

【浩茫】 カウバウ ひろびろと大なる
さまをいふ。

【眼界の外】 目に入るべき區域の外。

【翱翔】 クワウシヤウ かけりめぐる。

【關門】 クワンモン せきしよの門。

【印度總督】 インドソウトク 英國が、印

度を統轄せしむる爲におきた官

二二 ヒマラヤ紀行

(其の二)

【蒼黄】 サウクラウ 急遽キンキロに失したる態度。(あわてる。)

【絶世】 ゼツセイ 一世にならびなきこと。

【一種異様】 イツシユキヤウ 一種異りかるさま。

【感に打たる】 かんじがする。

【石逕セキケイを辿る】 石の多きこみちを、

おぼづかながらひろひ行く。(手探りしつゝ行くの意。)

【下弦カゼンの月】 月が弓状をなして、下方に見ゆるとき、即ち二十日すぎの月を云ふ。

【密雲】 ミツワン しげく重れる雲。

【森寂】 シンジャク しづかなること。

【蹄聲】 テイセイ ひづめの聲。

【憂憂】 カツカツ 物のすれあたる音をいふ語。

【反響】 ハンキヤウ ひびきかへす。(こだまをひびかす。)

【眼を眩ゲンす】 眼のまぶしくして、ちつと見て居れないこと。

【地平線】 チヘイセン 地平面とそらと相接する如く見ゆるところ。

【旭光】 キョククラウ あさひの光。

【屹然】 キツゼン 高さ貌。

【壯嚴】 サウゴン たうとく、おごそかなること。

【雄麗】 ユウレイ 雄大にして、りつぱなること。

【恍然】 クラウセン うつとりとして。

【言慮ゲンリョの外にあり】 言語思慮の外のこと。

【崎嶇】 キク さがしきみち。

【心膽を寒うす】 ぞつとするほどおそろしく感ずること。

【パノラマ】 全景を畫ける大なる油繪を、一室の周圍に展開して、繪の手前には實物を排置し、光線を程よく加減し、實物と繪との接續をさとの能はざらしむる様にして畫の全景を實物の如く見しむるもの。

【點綴】 テンテツ 點をうちたる如くにつらなること。

意にて、言葉にも思慮にもおもひ
あらはすことがかたきこと。

【筆舌の形容】^{ヒツゼツ} 筆の上や、口の上に
あらはすかざり。

【恐らくは】 たぶん。

【千古の大詩人】 太古より、塵^{ジン}未^ミ來^{ライ}
にかけての大詩人。

【心血を注ぐ】 心の底よりむきたつ
血を注ぎかける。

【描出】 ベクシユツ ぶがき出す。

【恍惚】 クワウコツ 心をうばはれて、
うつとりすること。

【舞蹈】 アタウ とびあがりておどる。

一三 望遠鏡と顯微鏡

【一顧眄】 イツコベン ちよつとふりか
へつて見る。

【看過】 クワンクラ みます。

【崇拜】 ソウハイ あがめたつとぶ。信
仰すること。

【反動】 ハンドウ 發動に對して、生ず
る動作の稱。(うちかへしのはたら
き)。

【一喙に附す】^{イツケツク} わらつてしまつて相
てのこす。

手にしないこと。

【その意を得ぬ】 心の内にかてんで
きぬ。

【傾向】 ケイカウ おもむき。

【疎放】 ソウハツ 物事にあらくして、や
りつばなしなること。

【磊落】 ライラク 舉動活潑明白にし
て、細事にかはらざるること。

【細心】 サイシン こまかき心。

【緻密】 チミツ きはめてこまかきこ
と。

【竹帛に垂る】^{チツハク} 書物の上にて後世ま
と。

【劇甚】 ゲキジン はげしく甚しい。

【雄偉】 ユウキ をしく大いなり。

【小心翼翼】 セウシンヨクヨク 物に慮
病にして、うやうやしく、慎深き
こと。

【瑣事】 サジ 小なる事。

【快感】 クワイカン こゝろよき感。

【誤解】 ゴカイ 思ひちがへをする。

【猛省】 マウセイ 心をふるひて、かへ
りみること。

【全局】 センキョク 全體の事柄。

一四 座右の銘

【いとほしみ】いとほしく思ふ。(愛す。)

【無能】ムノカ はたらきなきもの。

【辭は中るべく】ことばは理にあたるやうに。

【行は敏く】行ははきはきすること。

【篤からんこと】忠實にして、人情にあつること。

【法とす】のりてほんとする。

【怒に難を思ふ】腹の立つときには

難義の生ずることを思ふ。

【欲に義を思ふ】欲心の生じたるるときには、道に反してはゐないか如何にかと思ふ。

【樵夫】セウフ きこり。

【人各その業をたのしむ】人は各、自分の執るところの業務にやすんじ、それを愉快と思つて務むればはかゆきて世の信を受くるに至るべく、人のなすわざをうらやみ、自分の業をあなどるが如きは、おのづから人の信を失ひ、成效の期

なきものなりとの意。

【病は口より云々】病氣は食物をつしませざるより生じ、禍は言語をつしませざるより生ずるものなりとの意。

【他山の石は玉を磨くべし】玉は夫下に至つて美なるものにして、石

は天下の至つて悪しきものなり。然れども、玉は石によりて磨かれて器をなす。君子と小人と共に居ること恰もかくの如し。而して君子は小人に迫害せられて、こゝろ

を動し、性を忍び、省修研磨して、おのづから義理生じ、道德成ると云ふ意なり。

【憂患の事云々】憂患の事にあひてよく之れを忍び、益々不撓不屈にして奮勵すれば、遂に智徳を磨きて、君子の人ともなることを得べしとなり。

【水を飲んで云々】粗衣粗食に安んじて、身の不平をいはず、樂む人もあれば、錦衣美食に飽きて猶不足を歎ずる人もあり、これ皆己れ

の心懸ひとつによるものなりとの意。

忠言はさくべきものなりとなり。

一五 蘆庵と君平

(其の一)

【出づる月を待つべし云々】 將に來らんとするものは、つとめて之れを待ち得んことをつとむべく、既にすぎ去りし事は、追ふことなかれとの意なり。

【天朝】 テンテウ 朝廷のこと。

【舊典】 キウテン ふるまかきもの。(古文書。)

【忠言は耳にさかひ云々】 まごころをこめて云つてくれる言葉は、耳

【昇平】 ショウヘイ おだやかにあさまること。(太平。)

に入りがたけれども、行に利あり良薬は口に苦くして飲むにつられども、病に利あるものなれば、

【洗ひ清められ】 洗ひ去つた如くに残るところなきこと。

【安からぬ】 安心い出來ないことだ

の意。

のこと。(林道春の後。)

【死力を盡す】 必死の力を盡す。

【儒學】 ジュガク 孔孟の説きたる學問の稱。

【終身喪】 シウシンノモ 生涯喪に居ると云ふこと。(喪は人死して一定の期間、憂に沈みて引籠り居るをいふ。)

【文人墨客】 アンジンボクカク 詩文に心を寄せたる人や、書畫をかく人。

【遊學】 イウガク 郷國を出て、他國に行きて學問すること。

【革命時】 カクメイノトキ 二君に事ふる様のことなく、終始其節を全うすること。(革命とは天命の革りて政治上に變體を生ずるを云ふ。)

【持論】 チロンの 主持する所の論。

【時情に愜はず】 時代の人情風氣にあはない。

【臍を堅む】 リンケ 了簡を定むること。

【林家】 リンケ 徳川幕府の儒官林氏

【迂闊】 ウウワツ 事情にうとさきこと。(まはりどほし。)

【狂妄】キヤウバウ さちがひじみたる
【これが資】これが「もと」と云ふこ
こと。

【ものゝ數ともせず】物の數の中に
あるものとも思はない。(何とも思
はぬこと。)

【愈守る】いつそう、自分の主張を
主持すること。

【自ら貶さず】自ら自分の主張をま
げて、人より見くださるゝが如き
ことをしない。

【通達】ツウタツ 明に達して、しらべ
がとゞいて居ること。

【名正し】名分正しの意。(名分は君
臣父子の間の分際を云ふ。)

【俗儒】ソクジュ 見識せまく、心いや
しき學者。

【夏夷順逆】クワイジユンギヤク 中國と
蠻夷と、君に順ふと君にそむくと。
(夏は華夏クワクにて、文華の義、自國を
尊んで云ふ語。)

【名を亂り】名分をあやまること。
【言を紊る】言ふ所正道を失ふこと。

【その位】政府の要路にたつものを
云ふ。

【古今一致】

ココンイツチ 古も今もか
はるところなく、符節を合せたる
が如きを云ふ。

【憤を發し】^{イキドホリ} 充ちふさがつて居る情
のちこりたつこと。

【古學】コガク 古代の事を研究する
學問。

【逸史】イツシ 正史にもれたる史實。

【經世】ケイセイ 世を治むること。

【曲學】キョウガク よこしまなる道を

唱ふる學者。

【阿世】アセイ 世の中の俗人におも
ねりへつらふ學者。

【名教の罪人】人倫の教の上に害を
及ぼす人。(名教は儒道の教と云ふ
ことにて、父子の親君臣の義の如
き名目ありて、みだすべからざる
人倫の教の意なり。)

【鄰をなごし】^{トナリ} 鄰には居ない。(共に
世には立つまじの意。)

【山陵】サンリヤウ みさしぎ。(帝王后
妃などの墓所。)

【定かならず】 たしかならず。

【風雪を犯し】 風雪の間を、無理からでもふんで行く。

【経歴】 ケイレキ へめぐる。

【志は移らず】 志はかはることがな
し。

【探求】 タンキヤ さがしもとむる。

【困じ果て】 こまりきつた。

【萬葉風】 マンエフツ 萬葉集時代の
歌のふり。

【世に拗ねたる】 我が主張を守りて
世の中の一般の風に従はない。

【隱逸】 キンイツ 世をのがれて、かく
るること。

【おとなふ】 訪問すること。

【はるばる】 遠方といふ意。

【儒者】 ジュシヤ 學者。(儒道を講ず
る者の意。)

【客を辭し】 客を辭退する。(面會を
謝絶する。)

【ものせる】 交際をする。

【うるさし】 めんだうくさし。

【所望に従ふべくもあらず】 あのど
みにまかせやうにも、まかせるこ

とが出来ない。

【つばらに】 つまびらかに。

【枉げて】 むりからでも。

【しかじか】 かやうかやう。

【氣質の俗ならぬ】 心だてが、世の
常の人のやうでない。

【ものから】 ものながら。

【長者】 チャウシヤ 目上の人。

【和殿を勞せん】 おまへさんに面倒
をかけやう。

【取り次ぎ給へ】 つたへてくれの意。

【對面】 タイメン 面會すること。

【悔し】 くやむ。(後悔する。)

【ひたすら】 いちづに。

【得がたき學士】 たくさんには得ら
れない學者。

【杖を留め】 とうりうすること。

【他事もなく】 よそごととも思はず
(へだてなく心をこめての意。)

一六 蘆庵と君平

(其の二)

【ともしれば】 どうかするか。

【風呂】 ヨシタウ 浴湯の槽なり。(浴槽。)

【心づかひ】 心をさまざまにつかうこと。配慮。

【心苦し】 こころづらい。(氣の毒なり。)

【ひたすらに】 ひとむきに。

【更闌け】 夜ふけての意。(更は午後八時より午前六時迄、一夜を五つに區分したる稱、初更は八時、二更は十時、三更は十二時、四更は二時、五更は六時なり。)

【子二つ】 午前一時ごろ。(子の刻は夜の十二時なり。)

【させるもてなし】 これと云ふ程の待遇。

【思ひ斟み】 酌量すること。(くみわける。)

【道ぐさくうて】 馬などの、路傍に草をくうて歩みのおそきが如く、途中にぐづぐづ遊び居ることを云ふ。

【物を思はせ】 心配をかける。

【心得がたし】 承知が出来ない。

【眩く】 ぶつぶつ獨言を云ふこと。

【容を改め】 んずまゐをなほす。(か

してまゐる。)

【うらみ】 不快に思ふこと。

【理なり】 もつともだ。

【非を飾る】 あしきをかざりて、よきやうにもてなすこと。

【懺悔】 ザンゲ 過去の罪惡を悟りて、後悔すること。

【思はずも】 思ひがけなくも。

【等持院】 トウジキン 山城葛野郡にあり。足利義詮の創建にして、尊氏の廟塔とせる寺なり。

【年頃のうらみ】 年來の不快に思ふ

心。

【心頭に起り】 ひなさまにむらむらとすること。

【罵る】 聲高く呼びたてる。

【梟臣】 ケウシン 悪しき臣の義。

【靈あらば】 心あるならばの意。

【たしかに】 きつと。

【建武重祚】 ケンブチョウソ 後醍醐天皇の、隱岐より還幸して、再び帝位にのぼらせたまふを云ふ。

【逆に取り逆に守る】 道理にたがひて取りたるものを守るにも亦順な

らずして、天下の亂をひきおこしたるを云ふ。(史記に、「湯武逆取以順守之。」とあるによれり。)

【毒を後世に流し】 害毒を後の世までものこす。

【干戈】 カンクワ いくち。

【飽くまで物を思はする】 はてのはてまでも心配をさせる。(どこまでも心配をさせる。)

【思ふがままに】 おもふ存分に。(十分に分。)

【聲したり】 のんでしまつた。

【足もさだまらず】 足のよろ／＼するること。

【株】 クロヒ 木のさりかぶ。

【うまい】 熟睡なり。(ねいること。)

【呵呵と】 「からから」との意。

【馬鹿者】 バカモノ 梵語の「慕何」にて、無智なるもの、稱。

【去にし年】 先年。

【靈山】 レウザン 靈鷲山のことなり。

【逍遙】 セウエウ それのことなく、あるまはる。

【長嘯子】 チャウシウシ 木下勝俊とて

豊臣秀吉の臣、小濱城主なりし人なり。

【ゆきもえやらす】 ゆきすぎもえせずして。

【にらまへ】 にらみつけて。

【不滅の罪】 いつまでも滅亡せざる罪。

【わぬし】 和主にて、「おまへ」と云ふこと。

【外族】 カライゾク 婦家の一族の意。

【采地】 サイチ 食邑なり。(知行所。)

【心ざま】 心のもちかた。

【籠城】 ロウジヤウ 城にたてこもること。

【旗色】 ハタイロ 軍勢の様子。

【鬼胎】 キタイ おそれ。

【棄殺】 ステゴロシ 元忠を棄て去りて死に至らしめしを云ふ。

【世捨人顔】 ヨステビトガホ 世の中の交をたちて、隠遁したる人の様な顔付。

【えせ歌】 悪しき歌、又はいやしき歌など云ふ義。

【一盲衆盲を引き】 一人のめくらが

多くの盲をみちびきゆくに、先なる盲人が、誤りて火坑にみちびけば、衆盲またこれに従ふと云ふことにて、一人誤を傳へて、多くの眼識なき人、悉くこれに従ふを云ふ。

【歌の調】^{シラベ} うたのてうし。

【冥罰】^{メウバツ} 神佛の冥々^{イイク}の中に與ふる罰。

【腹を抱へさ】^カ おかしさにたへずして、腹をおさへて笑ふこと。

一七 岡井某に與ふ

【かき餅】 正月の具足餅^{グソクモチ}を切るを忌みて、缺きたるに起れり。後には細長くうすく切りて、炙りて食うやうになれり。

【饗應】^{キヤウオウ} もてなし。

【かねがね】 以前から。

【林大學】 述齋と號す。名は衡、幕府の儒官なり。

【出府】^{シュツプ} 江戸にてること。

【一天の君】 一天下をしろしめす君の義。

【第一義】^{ダイイチギ} 第一とすべきす

ちめ。

【さまで】 それほどの。

【有識】^{イウシキ} 見識のある人。

【等閑】^{トウカン} なほざり。(うちすて、氣にかけざること。)

【なげかはしき】 なげき悲むべきの意。

【老中】^{ラウヂユウ} 幕府の政務官にして、大老の次の官なり。

【政教】^{セイケフ} 政治教育の意。

【忠功】^{チュウカウ} 天子の爲につくしむこと。

【旗本】^{ハタモト} 知行一萬石以下、百石以上の將軍家直參の士。

【腰の物】^{コシモノ} 刀脇差のこと。

【支度】^{シタク} 用意。

【浪浪】^{ラウラウ} さすらふこと。(浪人者の意。)

【物入】^{モノイリ} 入費といふこと。

【金賣橋次】^{カネウリキチジ} 奥州に産出せる砂金を携へて、京地に賣り出す、商人の橋次と呼べるもの、こと。

【天川屋儀兵衛】^{アマカハヤギヘイ} 赤穂

義士の爲めに力を盡して、軍資を供給せし人。(泉州堺の商人なり。)

【霜雪の寒を冒し】霜や雪の寒さの中をむりからあしきつて。

【義舉】ギキョ 義の爲にあこす事業。

【忠感】チュウカン 天子の爲めにつくす心の思ひ。

【母方】ハハカタ 母の方の血統。

【姻戚】インセキ みよりのもの。

【一郷の良】イチケウノリヤウ 一地方の選良の意。

【御堂の關白】ミヅウ 藤原の道長のこと。

【別業】ベツゲフ 別荘。

【なかなか】かへつて。

【平安時代】ヘイアンジダイ 平安朝時代の意。(桓武天皇以後源平時代まで。)

【末世】マッセ するゑの世。

【兵燹】ヘイセン いくさの火。(兵火。)

【めてたかりけんを】立派であつたであらうにまあ。

【一斑】イツパン 一部分。

【遠きからに】遠きが故に。

一八 平等院の鳳凰堂

【文華】ブンカワ 文明の光華の意。

【燦然】サンゼン きらびやかなるさま。

【樓】タカドノ 家の上に、更に重ねて造りたる殿舎。(高樓。)

【廊】ワタドノ 廊下。(ほそどのとも云ふ。)

【加減する】加へたりへしたりすること。

【簇入】カンニフ はめこむ。

【本尊】ホンゾン 寺院に主として、まつれる佛像。

【螺鈿】ラテン あふむがひなどの殻

の、眞珠の光を放つ部分を、種々の形に細工して、はめこみて飾りとなしたるを云ふ。

【七寶】シツパツ 金、銀、瑠璃、玻璃、珊瑚、碼瑙、眞珠の七種の寶玉を云ふ。

【欄間】ランマ 天井と鴨居との間にある、格子又は裝飾せる板の部分。

【雲中供養】ウンチュウクヤウ 雲の上にて供養する意。(供養は回向するを云ふ。)

【浄土】 シヤウド 清浄なる國土の意。

【九品】 クホン 極樂往生の等級にして、上中下の三品あり、更に各三つに分ち都合九つとなる。

【説相】 セツサウ 理義のありさま。

【繪所】 エドコロ 禁中にありて、繪の事をつかさどりし官。

【剝落】 ハクラク はげおつる。

【たどらるゝ】 おぼつかながらたづねもとむる意。

【阿字の池】 アハジノイケ 阿は亞なり亞の字形に造りたる池。

【ものさび】 年を経て、雅致にとんでをること。

【釣殿】 ツリドノ 水に臨みたる殿舎。

【宇治文庫】 ウジブンコ 文庫は圖書館のことなり。

【ゆかし】 何となく昔なつかしい。

【扇の芝】 アフギノシバ 頼政が自殺せし舊蹟なりとして、今に平等院の佛堂の下に小叢あり、之れを俗に扇の芝と云ふなり。

【沼沼】 タウタウ 水の盛に流るゝ貌。

【たたなはれる】 かさなる。(重疊。)

をとげたと云ふ義なり。

【あらがき】 あらき垣。

【補刻】 ホコク おぎなひ、さざみつける。

【氷魚】 ヒヲ 魚の名、色白く氷の如し、秋の末より冬にかけて捕はる。

【さだかに】 たしかに。

【忍ばれてなん】 思ひいだされて、かくは物したわけじや。

【幽邃】 イウスキ おくふかく、しづかなり。

【宇治のあじろに云々】 「伊勢武者はみなひをどしの鎧きて、宇治の網代のかかりけるかなる。」と源仲綱の詠みたる歌をいふ。あじろは、冬期水中に竹又は木を組み、網の代りとして、魚を捕ふるに用ゐるものなり。さて歌の意は、伊勢の武者は、皆緋にてをどしたる鎧をきて、宇治川にせめよせて來たが、やがて皆網代にかゝつて戦死

【中興の大業】 コウノオホノサセ 盛に興る運にあたれ

【建武中興論】 建武中興論

【六五】 六五

る、大いなるみわざ。

【くちをし】 残念なり。

【論ふ】 論じ争ふ。

【成敗の事の迹】 事の成りたると、敗れたるとの事迹。

【そのかみ】 其當時。

【いてや】 發語の詞にて、人に呼びかけるに用ゐる。(さあ)

【風氣】 風俗。(世のならはし。)

【なりしづみ】 おとろへたること。(沉淪。)

【いでます】 遷幸したまふこと。

【隱岐の判官】 隱岐の守護たりし、

檢非違使の尉のことなり。(檢非違

使尉は、衛門の尉の兼帯にして尉

は判官なれば判官と書きたる也。)

【下知】 ゲチ さしづ。

【兒島三郎】 コジマサアラウ 高德のことなり。

【天莫空勾踐】 テンコウセンナムナシウス

ルコトナカレ 後醍醐天皇を勾踐にた

ぐへて、「越王勾踐は吳王夫差と會

稽山に戦ひやぶれたとき、范蠡を

臣とし、臥薪嘗膽して報復をはか

つたと申します。されば上天は、

今後醍醐天皇様が、戦ひやぶれて

隱岐に遷幸したまふとも、必ず保

護しまゐらせたまうて、いまのま

ゝにて隱岐に終らせたまふが如

きことなからんことを願ふ。」と云

ふ意。

【時非莫范蠡】 トキニハンレイナキニシモ

アラズ 「昔范蠡は越王勾踐を助け

て、報復をはかつたと申しますが

今にまた范蠡の如き人物があらは

れて、後醍醐天皇の御力ともなり

て、報復をはかり奉るものがない

てはありますまい。」と云ふ意にて

暗に己れが勤王の志あることをほ

のめかせるなり。

【うなづき】 がてんすること。(點頭。)

【太平記】 タイヘイキ 花園天皇より、

後村上天皇に至る、五十四年間の

戦史なり。

【猪武者】 キノシ、ムシヤ 思慮分別も

なく徒に突進する武者。

【ものまなびに暗し】 學問の道にあ

かるくない。

【物の理を辨へざりし】 物の道理をくみわけることができなかった。

【思ひはかる】 想像する。

【建久このかた】 源頼朝が幕府をたてし頃より以來。

【武家の世】 武家の政權を取るやうになつた世。

【士といはるゝほどの者】 士と云はるゝ位の者。

【莊園】 シャウエン 中世以來、朝廷より功臣に賜はりし、私領の土地。

【闕所】 ケツシヨ 領主のかけたる土地。

【押領】 アフレウ おしとる。

【せばや】 しやうかしらんの意。

【さながら】 まるで（全然）。

【夜見の國】 人死して後、靈魂の行くべき處を云ふ。

【醜女】 シコマ 夜見の國に居るといふ妖怪。

【集ひ荒ぶる】 あつまつて亂暴する。

【葎生ひしげり】 雜草がはえしげる。

にて、大義名分の明かならず、綱常のみだれたるをいふ。

【道も分かず】 みちもわからず（人道のすたれたるを云ふ）。

【大御稜威】 オホミイツ 朝廷の御威光。

【難しとも難し】 かないといふが上にもなほかたい。

【あながちに】 強ひて。

【御はからひ】 御處置。

【おしなべて】 總體。

【際】 キハ ばあひ。

【しるべ】 道しるべの事なり（指導者）。

【おぼつかなくやあらん】 たしかにうけあふことは、むづかしいであらう。

【承久の亂】 後鳥羽院の北條氏を亡さんとして、兵をあげさせたまひしをりの亂を云ふ。

【二位尼】 ニキノアマ 頼朝の妻政子を云ふ（官従二位なりしを以て二位尼といふ）。

【さかしらにたくみたる詞】 ものじ

りたる風にもてなして、かんがへをこらした詞。

【涙にひぢ】 涙にそてをぬらしてなり。

【門出】 カドデ 出發すること。

【踐祚】 センソ 天子の位にのぼりたまふを云ふ詞。

【段に】 ところと云ふ意。

【物も覚えぬ】 物の道理もわからな

【そぞろ】 何のわけもなきの意。漫

【あはれ】 あつばれ。

【持明院】 サメウキン 後光嚴院をさす
(後深草天皇の系統を有せる派。)

【大果報】 タイクワハウ おほいなる仕合せもの。

【おはせざり】 あらせられぬ。

【沙汰】 サタ 評判すること。

【あさましさ】 あきるゝばかり。(或はたのみがひなし。)

【しろしめし】 をさめたまふこと。

【かしこさ】 おそれ多き。(かたじけな

【おほみ業にこそ】 大業である。

二〇 芳野の行宮

【兇徒】 キョウト 悪しさものどもの意。

【歸參】 キサン かへつてくること。

【山門】 サンモン 比叡山延曆寺をいふ。

【臨幸】 リンカウ 車駕を枉げてのぞませたまふこと。

【いと進まず】 最もはきはきとはかどらな

【還幸】 クワンカン 宮城に車駕のかへらせたまふをいふ。

【あさましかりしことともなれど】 たよりなきことではあるけれども

(淺慮なり、又はおどろくばかりの意にも。)

【行末をおぼしめす】 將來のことを思召す。(回復の意あるをいふ。)

【東宮】 トウケウ 皇太子のこと。(恒良親王。)

【行啓】 ギヤウケイ いでましといふ義
(皇后、皇太后、皇太子の他に行き

たまふに云ふ語。

【朝臣】アソミ 四位以上の爵位ある人の敬稱。

【さるべき】 然るべき。(相當の又老功の武士の意。)

【尊號の儀】 太上天皇の尊號をもうけなされたいみにて。

【忍びて】 かくれて。

【召の具】 引きつれて。

【渡らせ給ひ】 御遷幸あそばして。
【在位の儀】 天子の位にましますいみにて。

【内侍所】 ナイジトコロ 神鏡のことなり。

【神璽】 シンジ 八坂瓊曲玉のことなり。

【奇特のこと】 こそありしか【めづらしいこと】であつた。

【義兵】 ギヘイ 義のためにつとむる兵。

【御志あるたぐひ】 勤王の志ある人々の意にて、瓜生、新田、楠木、菊池、名和の諸氏をいふ。

【親王を先だて申し】 ことの親王

は義良親王を云ふ。此親王をささぐにたてしなり。

【忠孝の道】 ことにて極りにき【一君父につかふべき道】はことにて終りはてたと云ふことにて、戦死するをいふ。

【苔の下にも云々】 苔の下に埋れたらんには、思ひ出のたねもなかるべきに、たゞ徒に名のみをこの世に残して、戦死をしたために、却つて物思ひのはしともなつたのはさても心づらい世の中であるわい。

【社壇】 シヤダン 社殿のことなり。

【上りあへず】 吉野へ上ることができなかつた。

【させることもなく】 これとかどにたてし、云ふほどの事もなくてなり。

【空しくさへなりぬ】 そのままにて越前の國藤島にて戦死をした。

【いふばかりなし】 何ともいはうやうがない。(義貞の戦死を歎息して云ひたる詞なり。)

【さてしも】 それにしても。

【陸奥の御子】 義良親王のこと。

【左少將】 サシヤウシヤウ 左近衛の少將なり。

【陸奥介】 ムツノスケ 陸奥の守の次の官なり。

【節度】 セチド 支配といふに同じ。

【儲君】 マウケノキミ 皇太子のこと。

【道の程も云々】 皇太子の御資格にて、東國に下り給はんには、道中など却つて煩はしくて、恐れ多きこともあらう。任國なる陸奥國に行き着きたまひて、發表せらるべ

しとなり。

【異母の御兄】 はらちがひのおあにさまにて、宗良、懷良などの諸親王をさせるなり。

【天命なれば云々】 しぜんの運命であるからして、ありがたいことじや。

【事の由を啓じて】 事の次第を申しあげて。

【御船のよそひし】 船仕度をする。

【纜をとかれしに】 出帆することと

の意なり。

【末の世】 道德のおとろへたる世。

【めづらかなるためし】 珍らしい

例。

【鄙の御住居】 陸奥の如き、かたゐ

なかの御住居と云ふこと。

【いかが】 どうであらうか。

【皇太神の云々】 鄙の御住居もおそれ多しとて、皇祖太神宮の御止めなされたのであらう。

【天位】 テンキ 天子の御位。

【思ひあはせられて】 先きに漂流し

もの綱をとくの意。

【おどろおどろしく】 おそるべきさま

まに。(驚く意。)

【漂はれ】 ふきながされる。

【行く方】 ゆくさま。

【さはりなく】 故障なく。

【御船にさぶらひけり】 御船のおともをした。

【風のまざれ】 あらしにまざれての意。

【方方に漂ひ】 「片片に漂ひ」にて、あちらこちらにふきながされたと

たまひしこと、天位につかされたまひたることとが、思ひくらべられて。

【尊くもありしかな】 ありがたくあつたなあ。

【もとより志す方なれば】 勤王の士多き地にて、初めより目ざして出立をした地であるからして。

【御志ある輩】 勤王すべき人士たち。

【相はからひて】 相共に謀り合ひて。

【義兵こはくなりぬ】 義のために擧げた兵が強くなつた。

【奥州野州の守】 陸奥守陸良親王、下野守左中將道世をさす。

【下向】 ケカウ くだつて来る。

【舊都】 キウト 京都をさす。

【おもひおもひ】 それぞれ銘々思ふまゝの意。

【もろこし】 支那の地。(唐土。)

【かかるためし】 このやうな例。

【大日本島根】 此の日本國はの意。

【いづくか都にあらざるべき】 何處

が都でないこと云ふことがあらうか三種の神器をもたせたまふ君のまします所、何處なりとて都でないこと云ふことはない。吉野の奥なりとてやはり都ぢや。

【十日あまり六日】 十六日といふこと。

【秋霧アキギリにおかされさせたまひ】 秋の山氣にさはりたまひてなり。

【隠れまします】 御崩御ましました。

【聞えし】 聞き及んだ。

【寝るがうちなる夢の世】 いねたるうちに、夢みるやうな世の中の意にて、たよりなきをいふ。

【今にはじめぬならひ】 今はじめて出来たことではない。昔からある例だ。

【かずかず】 あれやこれや数多く。

【目の前なる心地】 四五年以前のことを追想して見ると、今なほ目前に見ゆるやうな心持がして。

【老の涙もかきあへねば】 老人の涙もろくして、かきはらひがたけれ

ばなり。(書きあへぬに云ひかけたるなり。)

【筆の跡さへとどこほりぬ】 筆の跡をさへしぶりがちだ。

【仲尼は獲麟に筆をたつ】 仲尼は孔子の名なり。昔孔子春秋をかきて、「魯の哀公十有四年春、西狩獲麟。」とあるところにて筆をとどめた。

【神皇正統】 ジンノウシヤウタウ 天子の正しきみ血統。

【よこしまなるまじき】 よこしまであつてはならぬ。

【ことわり】 物の道理。

【素意の末】 本来の意の一端。

【表さまほしく】 表はしたいと思つて。

【強ひて】 むりから。

【かねて時をも云々】 あらかじめ、後醍醐天皇は、崩御になるべきを知りたまへるにかの意。

【左大臣】 サダイジン 關白經忠なり。

【後の號】 おくり名のこと。

【仰せのまゝに】 御遺言に従ひてなり。

【後醍醐の天皇と申す】 延喜天曆の治をしたひたまひければなり。

二二 閑日月

【よぢぢともの歌】 「關門はとぢぢとすとも、誰も通りこすものもあるまい。ゆふべから降る雪の爲めに、關所はことごとく埋れて居るからして。」と云ふこと。

【吉野山たれとむるの歌】 「吉野山に来ては、誰れがとめると云ふわけはないけれども、あまりに花の

おもしろさに、こよひもこの花の下にねて、寝ながら月下の花を見やうかとも思ふ。」の意なり。

【限あればの歌】 花の咲くべき期間といふものは、限りあるもので、いつまでも咲いて居るものではないからして、風は吹かずとも、花は散るべき時が来れば散るものなるに、短氣な山風じや。人の命數とても其の通りで、何時までも生きて居るものではない。死ぬべき時が来れば、人手にかけずとも死

ぬべきものなるに、さても短氣な
豊公じやわいの意。

のが多い。心すべき事じや。」と云
ふ意なり。

八〇

【急がずばの歌】「村雨と云ふもの
は、降るがうちよりあとから晴れ
てゆくのが常じやからして、急が
ずに待つてさへ居れば、ぬると
云ふことはあるまいものを、旅人
のあまりに急ぐが故にぬれるのじ
や。人のなすべき事も皆この通り
で、時機の來るのをまつてさへ居
れば、必ず成功すべきものなるに、
成功を急ぐが故に事をあやまるも

【武夫のうは矢の歌】武夫の心ひと
つに祈つたならば、神もその心の
内をあはれときこしめすであらう
の意なり。「うは矢のかぶら一筋
に」は、ひとすぢといはんために云
ひかけたるなり。うは矢は、上指
矢のことにて、箆に矢を配りさす
時、二十五さしたる中、鏑矢二本
を箆の表にさすを云ふ。鏑矢は、
鏑の一種にて、木にてまるく長く

ふくらめて作り、中を空にして、
雁股をそへて用ゐる。

るなり。

【行きくれての歌】「旅の道中にて

【武夫の矢なみつくろふの歌】「那
須野原にて、武夫の矢なみを整へ
てをる袖の上に、あられがふりか
ゝつて來た。」といふこと。

ゆきくれて、櫻の木かけを一夜の
やどとなさば、花こそは今よひの
主人であるだらう。」の意なり。

【あき風の歌】「秋風に、草木のお
びてをる露を吹きはらはせて、お
前さまがこえてゆけば、關所の番
人も、無事にお前を通して、こえ
ゆくことが出来るであらう。」の意
なり。(拂ふは、先拂の拂にかけた

【みやま木の歌】冬枯の間は、深山
にある樹の内にて、これぞ櫻の木
なりと、さして見わけることもで
きざりしが、春が來てさき出た
る花によりて、はじめて櫻なりと
いふこれがあらはれたの意。

【吹く風をの歌】吹くべき風を、吹

八一

き「な來そ」と云つて、止むべき詞を名としてをる「なこそ」の關なれば、風は吹くまじと思へるに、矢張こゝにも風が吹くと見えて、道も狭くなつて踏み所のない迄に、花が散つて居るとなり。

一一三 空行く雁(其二)

【新玉】アラタマ 年月日などに冠する枕詞なり。

【母御前】ハハゴゼ 古昔婦人の下に添へし語。(母上の意。)

【父は】 河津祐泰をさす。

【その佛】 そこにまつつてある佛にて、死せる父を云ふ。

【いざさせ給へ】 さあ出て立たせ給へと云ふ義。

【遙に忘れたるこしがた】 先夫の殺されたる往時。

【今さら思ひ出されて】 今あらためて追想せられて。

【消え入るばかり】 悲みのさはみたえいるほどに(息たゆ)。

【おのれ等】 汝等の意。

【心づよく】 すげなく。(無情けにの意。)

【涙に咽ぶ】 涙に聲をつまらせて。

【陳じやる方なし】 陳べんにも陳ぶべき方もなしの意。

【父御前】 チチゴゼ 御前は、もと婦人に添へて呼ぶ敬稱なりしを、此の頃は男子にも添へたるなり。今は貴人の主人に對しても此尊稱を用ゐる。(ごせん。)

【まことやらむ】 眞實であらうかの意。

【狩場より歸り給ふ云々】 赤澤山の狩獵の歸途、かねてその父伊東祐親に怨恨を抱ける、工藤祐經の家來のために射殺されたることをさすなり。

【工藤の一薦】 祐經のことなり。一薦は第一座の義。祐經京に宿衛して、檢非違使の尉なりしを以てかく呼べるなり。

【鎌倉殿】 カマクラドノ 頼朝をさす。

【さりのもの】 されものゝ意にて、權臣といはんが如し。

【知らてや過ぐらむ】 知らないて過すであらうか。

【おとなしく】 大人らしくなり。

【女房】 ニョウバウ つきそひ居れる侍

元どもをさせるなり。

【隈もなし】 くもりなくすみわたれるをいふ。

雁がね

【雁がね】 雁のことなり。

【別の翼云々】 親子兄弟の外のものを交へぬとなり。

人倫

【人倫】 ジンリン 人類といふにおなじ。

【馬鞍をも賜はり云々】 當時の武士

の子弟の遊戯の様を云へるなり。

【思ひ續く】 つぎつぎと思ふこと。

【さめざめ】 涙をこぼして泣く。

【こざかしく】 利口げに。

【顔をあはせて】 互に向ひあつてなり。

【乳母の女房】 子供をそだつる女。

【あなあさまし】 さてもあさはかなことじや。

【人もこそ聞け】 人もさいてをるであらう。

【和上郎達】 ワジウラウタチ おまへさんたち。

とくとく

【とくとく】 はやくはやく。

【飽くまで泣く】 十分なき足るだけ泣く。

二三 空行く雁(其二)

【竹の小弓】 竹にて造れる小さな弓。

薄矧

【薄矧】 ススキハギ すしきの莖もてはぎたる。

【遠侍】 トホザムラヒ 武家の邸内、中

門のききにある番侍の詰所。

【明障子】 アカリシヤウジ 細き木を格子にくみて、紙をはりたるもの。

【さし合ひ】 刺し合ふ。

【とにもかくにもなりなむ】 どうともならう。

うちうなづき

【うちうなづき】 合點して。首肯。

【領掌】 レウシヤウ うけひく。(承知すること。)

【年ばへ】 年齢のほど。

仰天し

【仰天し】 いたくおどろくこと。

【謀叛】 ムホン 主君にそむきて、つ

けねらうこと。

【伊東入道】イトウニフダウ 祐親のことなり。

【上】カミ 頼朝をさす。

【申しなして】云ひたてし。

【歎き申して】歎願しての意。

【大名】ダイメウ 領地を多く保てる領主の義。

【憐ませ給ひ】ふびんに思召して。

【安穩】アンボン 心配なく。

【希有の命】ふしぎの命。

【芳恩】ハウオン ありがたきおん。

【生生世世】シヤウジヤウヨヨ いつの世までも。

【返す返すも】かさねがさねにも。

【口惜かるべし】なげかはしことであらうぞ。

【口説きて】くりかへして説きさかせる。

【内内】ナイナイ 人知れずなり。

【談議】ダンギ 共に相談すること。

【出家】シュツケ 僧侶となること。

二四 誠

【司馬溫公】名は光宋の陝州の人。

【妄語】マウゴ みだりに語を發すること。

【闕下】ケツカ 宮門の下。

【下公門】君の門前を、車馬にて通過するは無禮なれば、車馬を下りて徒行するなり。

【式路馬】ロバニシキス 路は大なり。君の馬車を云ふ。君の馬車に行き逢ふときに、車の横木に手をかけて、車上にて敬禮を行ふなり。

【昭昭】セウセウ あきらかなること。

【節を信べず】心に主持する説を、殊更にたてやうとはしない。

【冥冥】メイメイ くらがりなること。

【行を墮さず】人格をおとすやうなことはしない。

【さして】それほど。

【帚灑】シウシヤ はきて水をそぐ。

【蜘蛛のい】くもの巢のことなり。

【見まがふべき】見まざるゝことがあらうぞ。見まざるゝ事とはない。

【たしなまず】つゝしまない。

【偽り文らんは】事實にあらざるこ

とをなして。うはべを立派にせん
とすること。

【なき名ぞとの歌】 「無實の取沙汰

なりと、人には云つてもそれによ
からうが、しかしおのれの心の問
うたならば、何とこたへるであら
う。人は欺くことも得らるけれど
も、おのれは欺く事はてきまい」。

【安からぬ悒鬱】 心のおちつかない
いぶせき思。

二五 鹽原

【やる方なし】 心のうれひのやりど
ころなきこと。

【不審を蒙り】 うたがひを受けるこ
と。

【茫茫】 バウバウ ひろびろとした。

【起請】 キンヤウ 誓約書のこと。

【平蕪迷ひ】 荒れたる平原の遙に連
れるを云ふ。

【斷雲】 ダンウン ちぎれたる雲。

【幾めぐり】 幾つともなく曲折した
る。

【坦途】 タント 平坦なる道。

【一帯の重巒】 チョウラン ひとつづきの重れる
山。

【葛折】 ッヅラヲリ 葛の曲折せる如く
に折返し折返して、曲折多きを云
ふ。

【路は窮らず】 行けども行けども、
はてしなきこと。

【幽草】 イウサウ 山深き處にある草。

【淙淙】 ソウソウ 水の流る音に云ふ
語。

【歩歩の花をひらき】 一歩一歩、あ
ゆむに従ひて花がさいてをる。

【入勝橋】 ニフシヤウバシ 峡谷の奇勝、
この地より始る故に名づく。

【木がくれの音】 木の間にかくれみ
えぬ水の音。

【厚く曇み】 幾重にもかさなる。

【浅くあらはれて】 少しばかりみえ
て。

【嵐氣冷に】 山氣の冷かなること。

【すはや】 突然の出来事に驚きて叫ぶ聲。(そりやこそこの意。)

【七不思議】 ナ、フシギ 白羽の連理の

【空山の雷】 人気なき山中の雷。すさまじかり】 ものすごかつた。

木、甘湯澤の冬の桃、古町の八幡社内の逆杉、一夜竹、冬の蓼、精進川の游魚、新湯の夫婦鳥等なり。

【珊瑚】 サンサン 玉の鳴る聲の形容。

【綿綿】 メンメン 長くつらなりて絶えざる貌。

【嶺上の松の調】 シラベ 峯の上の松風の音の調子。

【片そば】 一方の壑にのぞみて峻なる途。

【この緒よりやと云々】 この細瀧小瀧の、琴の絲の如き細き瀧のおつる音のかよひてかと思つて、見捨てることはできない。

【巉巖】 ザンガン 山の尖りて高さ貌。

【宛然】 エンセン あたかも。

【全逕】 センケイ 全體の山みち。

【薬研】 ヤゲン 薬種を碎くに用ゐる銅製の細長く、中凹く深く作れる

器。

【兒淵】 チゴガフチ

【俯瞰】 フカン うつぶして見る。

【左鞞】 ヒダリウツボ

【途すがら】 みちみち。

【朗に】 ホガラカ うちひらけて中のがらりと

【夢のやうに過ぎて】 うかうかと、おぼろげながらに、見て通りすぎ

おほいなるさま。

る。

【嶙峋】 リンジュン 山の切岸の時てる貌。

【粼粼】 リンリン 水清く石の間を流れて激する貌。

【激湍】 ゲキタン はげしき早瀬。

【翠巒】 スキラン あをさみね。

【怪石】 クワイセキ ふしぎなる形したる岩。

【清風座に満ち】 清らかなる風が、座敷中に吹きこむこと。

【磊砢】 ライラ 石の重りあつて大なる貌。

【素練】 ソレン しろきねり絹。

【琅玕】 ラウカン 玉の一種。

【玉簾】ギョクレンジ 玉にてつくれるす
だれ。

もきえてしまふほど、おそろしく
心おちつかず。

【丘壑の富を擅にし】をかやたにの
絶勝の富を獨わがものにする。

【藹然】アイセン 心の和げる貌。
【頓に和ぎ】急におちつきたる事。

【林泉のおごりを窮め】林中に流れ
もつる泉の好景をわがものとして

【恍然】クワウゼン うつとりとして、
【暢けし】のんびりとしたること。

のぜいたくをさほめる。
【別境】ヘッキヤウ 他にはあらざる境
涯。

【牢として】かたくなつて。
【半生の痼疾】生涯の半分の久しく
癒えざる病。

【清穩】セイワン けがれなきをだや
かなること。

【醫すべき】なほすことの出来る。
【歯牙にもかけず】口頭にも上せぬ

【魂飛び肉消し】魂も飛び去り、肉
こと。全然とりあげないこと。

【愚のものなれや】ばかものだな
あ。

【版圖】ハント 戸籍領地の義。版は戸
籍なり、圖は土地の形象、田地の
廣狭なり。

【浮世のものならで】此の俗世界の
ものではなくして。

【統治權】トウヂケン 國家を統治する
權力。

【かの雲と軽く】かの雲と同じやう
にかろい。

【雄飛】ユウヒ 他を威服して、はばを
さかすほどに飛びまはる。

【水と淡し】水と同じやうに、あつ
さりして欲もなにもない。

【努力】ドリョク つとめる。
【庶政】シヨセイ 百般の政務。

【我が生を終へんかな】我が生涯を
をはりたいものぢや。

【史張】カウチャウ おしはること。
【紹介】セウカイ ひきはせる。

二六 擴張せる日本

【世界的】セカイテキキ 一國土の内に限

らず、四海萬邦に關係を有する様
につとめること。

【國運】 コクウン 一國の運命。

【經濟】 ケイザイ 財を獲得し使用す
る各種の行爲。

【野鄙】 ヤビ 下品なること。

【對等】 タイトウ 雙方の間に、優劣高
下の別なきこと。

【氣分】 キブン こゝろもち。

二七 高田屋嘉兵衛

【船戸】 フナド ふな問屋のこと。

【拮据】 キツキョ かせぎ、つとむるこ
と。

【産を治め】 家産をとりしまる。

【轉漕】 テンソウ ふねをまはすこと。

【拓殖】 タクシヨク 開墾して、殖民す
ること。

【公廩】 コウリン 政府の倉。

【互市】 ゴシ 交易すること。

【通商】 ツウシヤウ 異なる國と互に交通
して、商事をいとなむこと。

【祖法】 ソハフ 先祖以來定めたるお
きて。

【通好】 ツウカウ よしみを通じて、交
をむすぶこと。

【反復】 ハンプク くりかへす。

【使命を果す】 使者として、君主よ
りのいひつけをなすとげる。

【慚愧】 ザンキ はづること。

【憂鬱】 イウウツ 氣のむすぼれて病
氣となること。

【報復】 ハウフク しかへし。

【無頼漢】 フライカン 一定の職業なく
性行不法なるもの。ならずもの。

【暴掠】 バウリヤク 亂暴をはたらいて

物をかすめとる。

【大擧】 タイキョ 多くの人數をくり
だして。

【入寇】 ニフコフ せめいること。(い
りてあたをなす。)

【警報】 ケイハウ 警戒すべきしらせ。

【震駭】 シンガイ ふるひおどろく。

【不慮に備ふ】 萬一の用意をする。

【戍卒】 ジュソツ 國境を守備せる兵。

【俘者】 フシヤ 捕虜となれるもの。

【漂流民】 ヘウリウミン 風波の爲に流
されたる人。

【哨艇】セフテイ 見張の船。(偵察船。)

【烽を擧げ】のろしをあげる。

【守備を修む】守るべき用意をと、のへる。

【不意に出て】突然に出来た事での意。

【擧伏】セフフク おそれて、ひれふすこと。

【指揮に應ず】さしづによつてはたらくこと。

【威容森然】キヨウシンセン いかめしみまが、どつとするやうだの意。

【殺氣を含む】殺伐の状をもつて居る。

【昂然】コウセン つんとして腰を屈せざること。

【神色自若】シンシヨクジジヤク かほつみが常のとほりであつた。

【敬憚】ケイタン うやまひおそるゝ。

【延いて】通して(みちびく)。

【縷縷言ふ所あり】言葉長く云ふ所があつた。

【商議】シヤウギ 相談すること。(商も議も共にはかると訓す)。

【嚇す】キョウソク 威赫すること。

【豪語】カウゴ えらさうなことば。

【侮蔑】フベツ あなどりさげすむ。

【期するところ】あてにするところ。

【刀を案し】刀に手をかける。

【膝行】シツカワ ひざすりよせて。

【目眦皆裂く】まなじりが皆さける(怒れる様に云ふ語)。

【膽落ち】おぢけのさすこと。

【氣沮み】元氣を失ふこと。

【意釋け】氣げんをなほすこと。

【毅然】キセン 容を正してゐたけだかになる。

【拉して】つれて行く。

【反目】ハンモク 互ににらひあふ。

【釋放】シヤクハウ ゆるされてはなたる。

【消息】セウソク やうす。(ありさま)。

【副刀】フクタウ わざし。

【疾視】シツシ にらむこと。

【葛藤を解く】もんちやくを、なくする。(もめをとく)。

【要し】むりからあさへつけて。

【心を安んぜよ】 安心せよの意。

【面目あつて】 かほがあつてなり。

【一抹の暗雲】 ひとなでしたほどの

くろくも。(今にも兩國の間に戦雲
のおこるにたとへたるなり。)

【遺恨】 キコン うらみ。

【冷笑】 レイセウ あざわらひ。

【豪爽】 ガウサウ 氣象のつよくして、

さつぱりしたること。

【義侠】 ギケフ をとこぎのあること。

【旗旆】 キハイ はた。

【隠退】 キンタイ むんきよしてしりぞく。

【士班】 シハン 士の席次。

【優遊】 イウイウ 心にわづらはしき

ことなく、ゆつたりすること。

二八 荒井城址

【對岸】 タイガン ひかうぎし。

【萬夫に當る】 萬人を引うける力。

【荆棘】 ケイキョク いばら。

【松籟】 シヤウライ 松風の音。

【うらさびし】 心さびし。

【末路】 マツロ 生涯のはて。(物事の
おとろふるとき。)

量なり。

【滔滔】 タウタウ 水の盛に流るゝ如

くに、勢の盛なるを云ふ。

【命の歸する所】 天命のおもむくと

ころ。(運のつきたること。)

【烏兔匆匆】 ウトサウサウ 月日のすぎ

ゆくことの早さを云ふ語。

【大中黒の征矢】 鷲の羽の中央に、

大きく黒い斑のある羽にてはぎた

る軍陣に用ゐる矢。

【櫻ずかしの鏃】 櫻形をすかした矢

のね。

【弔ふ】 トムブ 尋ね來て、追福をなすこと。

【契淺し】 チキリ 前世からの約束が淺い。

【矛を枕の夢にも通ふらん】 矛を枕

としたる陣中の假寢の夢に、この

濤の聲が通うであらうの意。

【平布の芝原】 布をしいた様な平な

るしば原。

【怨魂】 エンコン うらみあるたまし

ひ。

【切所】 セツシヨ 嶮岨の所。(難所。)

【勇士雲の如く】 勇士の多きこと。

【千駄の粟】 センダ 駄は一匹の馬に負はず

【鉢金さばきの鬢髪】ヘチガネ 鉢金にさばき

かけたるびんのかみ。

【あやしさよ】 いぶかしきことよ。

【山河ひとに命長し】 山河ばかりは

ひとへに命數ながくして昔の通り

であるの意。「ひとに」は「ひとへ

に」の誤ならんか。」

【醇化】ジュンクラ 雑駁な知識を分類

して、系統を立て、不純粹なる分

子を除去すること。

【圓滿完全】エンマンクワンゼン 十分に

充足ちりて、缺けたる所なきこと。

【風采】フウサイ ふらつき。

【優美】イクビ 上品にして、けだか

らぬこと。

【態度】タイド からだのかまへ。

【莊重】サウチヨウ おごそかに、おも

おもしい。

【暢然】チャウゼン のんびりとして、

二九 心育と體育

【理想】リサウ 吾人の理性によりて

想像して、完全なりとする目的。

【訓育】クニイク をしへそだつる。

せまらざる貌。

【確乎】カクコ しつかりすること。

【參與】サンヨ 加はりあづかる。

【心育】シンイク 精神上の訓育。

【調和平均】テウワヘイキン ほどよく

ととのひ、不同ならざること。

【常識】シヤウシキ 健全なる普通一般

の理解、又は道義心。(常人のなす

べき道にはづれず、時代に適應し

たる識見。)

【聰明叡智】ソウメイエイチ 見聞共に

さとして、深遠なる智識。

【極致】キョクチ 十分その趣をつく

したきはみ。

【懸河の辯】ケンガベン 水の早く流るゝ如く、

辯舌のよどみなきこと。

【高雅の趣味】コウガシユミ 高尚にして、上品な

る趣味。

【獨立特行】ドクリツトクカウ 他人を

たよらずして、自分の力にて事を

なすこと。

【氣概】キガイ するどき氣象。(いさぢ)

【修辭】シウジ 言葉を潤色して、うる

はしく巧ならしむること。

【能辯術】ノウベンジュツ 辭舌の達者

になる事を研究する學。

すべき性。

【朗讀】ラウドク こゑ高くほがらかによむ。

【論理學】ロンリガク 公理に基き、正

確なる理路を辿りて、斷案を見出す法則を研究する學。

【旌表】セイヘウ 人の前にあらはす。

【哲學】テツカク 自然人生、及び知識

の現實理想に關する根本的原理の學。

【聯關】レンクワン つながりかゝはる。

【趣味性】シュミセイ 人の感興を惹起

【精粹】セイスキ すぐれて純一なる

こと。

訂修 中等國語讀本卷五終

訂修 中等國語讀本字解(卷六目次)

一、准后親房(その一).....	一〇三	二三、空論を避くべし.....	一四六
二、同(その二).....	一〇七	二四、讀書の選擇.....	一四八
三、月雪花.....	一一一	二五、室鳩巢に興ふ.....	一五二
四、小品二篇.....	一一五	二六、成吉思汗.....	一五四
五、笠置山.....	一一六	二七、武士道.....	一五六
六、西郷隆盛に興ふ.....	一二二	二八、如意輪堂.....	一六〇
七、福原.....	一二七	二九、人臣の道.....	一六五
八、藝苑逸話.....	一三二	三〇、はれぬ雲.....	一七〇
九、天野川.....	一三八	三一、道德と法律の關係(その一).....	一七一
一〇、白峯の陵.....	一四〇	三二、同(その二).....	一七四
一一、文話の一則.....	一四四	三三、忠度と俊成.....	一七五

二三、知己難……………	一七八	二六、我が國の海運……………	一九〇
二四、桃李不言……………	一八五	二七、蘭學事始(その一)……………	一九四
二五、棧の記……………	一八七	二八、同(その二)……………	一九五

訂修 中等國語讀本字解(卷六目次) 終

訂修 中等國語讀本卷六

一 准后親房(その一)

【精彩を放つ】^{ヒイサイ} 立派な光をはなつ。

【忠勇義烈】^{チュウユウギレツ} 忠義心

あつて勇氣に富み、且つ節操の堅

きこと。

【殉國の美譚】^{ジュンコクビダン} 國の爲に己の身命を
投げ出して竭しし美談。

【村上源氏】^{ムラカミゲンジ} 村上天皇

の皇子、具平親王の子右大臣師房、
後一條天皇の寛仁中、始めて源朝
臣の姓を賜はる、此の後裔を世に
村上源氏と云ふ。

【大納言】^{ダイナゴン} 大臣と共に太政
官の政事を議し、大臣なきときは
政務を専行す。されば丞相に次ぐ
と云ふ意より、亞相とも云ふ。

【わが世盡さぬる心地】 現在の世が

死滅したやうな心地がした。

【朝野】 テウヤ 朝廷におかせられても、民間にてもなり。

【幹旋】 アツセン 幹も旋も共にめぐると訓む字にて、周旋の義なり。周旋して事を執り行ふを云ふなり。

【史籍】 シセキ 歴史。

【徴す】 チョウ 證據とすべきもの。

【大臣に准ぜらる】 大臣になぞらへたる待遇を受けること。

【無爲】 ブキ なすことなくして手を拱きて居ること。

【九重雲深し】 九重は禁中を云ふ。

天子の位置を九天にたとへて云ふなり、九天の上は雲深く鎖されたればなり。

【消息】 セウソク 消は往なり、息は來なり、「おとづれ」「やうす」などの意。

【公武の軋轢】 アツレキ 公家と武家との間に於けるすれあひ。

【英邁】 エイマイ ひいて、すぐれたること。

【黒幕】 クロマク 表に立たずして指

圖すること。

【結託】 ケツタク 互に心を通じて助け合ふを云ふ。

【果決の手段】 果決の手段 思ひきつて事を行ふてだて。

【肘を掣し】 肘を動かさんとするに傍より之れをひくと云ふことにて事をなさんとするに、後方より牽制して。自由の行動をとらしめざるを云ふ。(魯の宓子賤。吏をして字をかゝしめ。其肘をひきて書せしめず。書悪ければ則ち之れ怒れ

りと云ふ故事に出づ。)

【跳梁】 テウリヤウ 跳りて亂走すること。(かけまはる。)

【打撃】 ダゲキ うちくじくこと。

【陸奥守】 ムツノカミ 陸奥の國守のことなり。(地方長官。)

【經營】 ケイエイ 度りいとなみて、創業の基礎を定むること。

【大規畫】 ダイキクワク 大なるもくろみ。

【廟謨】 ベウボ 朝廷のはかりごと。

【歴歴】 レキレキ 明なる貌。

【方寸】 ハウスン 胸中。(むねのうち)

【電馳】 デンチ いなづまの如くに急ぎてかけつけること。

【繪旨】 リンシ みことのり。

【經略】 ケイリヤク はかりをさむる。(天下を經營し、四海を略有する義より出てたるなり。經は度なり。略は治なり。)

【龍虎の兩將】 龍や虎の如き猛將の意にて、顯家義貞等を指す。

【股肱】 コカウ 「ひび」「もも」の如くに頼みとする良臣を云ふ。

【義萬斛の涙】 はらへどもはらへどもはふり來りて止らざる涙。

【逆旅の雨】 旅の出先の地における雨。

【先帝の顧命】 さきの天子、即ち後醍醐天皇御臨終の御依託。

【骨子】 コッシ ほね。(主眼。)

【仰望】 ギヤウバウ こゝろをよせて慕ふこと。

【衆星の北辰に向ふが如く】 北辰星ホクシンが、一定の所にありて、衆星の其のまはりに居るが如く、人々の歸

向するを云ふ。

【關山數百里】 クワンザンヌウヒヤクリ

關山を越えて、數百里も隔りたる地、(關山は雁山にて、支那にて胡地に越ゆる處にある高山なり、雁のこえなやむを以て、山嶺を切りひらきたれば、雁門と云ふとぞ。)

【辭せず】 いやとは思はず。

【成敗】 セイバイ 政事上の命令。

二 准后親房(その二)

【苦心慘憺】 クシンサンタン 心をくる

しめ思をなやます意。

【言を左右にす】 詞をあれやこれやにかこつける。

【異圖】 イト 謀叛の計畫といふ意。

【相持す】 互に守持して相降らざること。

【八紘】 ハツクワウ 八方の綱維なり。

天地を維ぎて綱紀とする義。(八方。)

【夜雨蕭々】 ヤウシヤウシヤウ 夜の雨

のものさびしく降るさまを云ふ。

【羈愁を催す】 キンウ 羈旅の身に愁心をも

よぼすこと。

【楚歌四面に起る】 身外皆敵となりたる状態に云ふ語。楚の項羽が、漢の高祖の爲に垓下に圍まれたるとき、夜深けて包圍せる漢軍中に楚歌の起れるを聞きて、楚國の民既に漢に降りたるを知りたりてふ故事によりて、味方の盡く敵に降りて、孤立せる様にいへるなり。

【胸中綽綽】 キョウチュウチユウシヤクシヤクむねの中が、ゆつたりとしてをるこ

【餘裕】 ヨユク ヨーと。

【上乘】 シヤウシヨウ 最もすぐれたるものゝ意。

【正閏を分つ】 ^{セイジュン} 正統と正統ならざるを區別する。

【堂堂】 ダウダウ 雄大にして立派なる貌。

【成敗】 セイハイ 成效と失敗。

【識見超拔】 シキケンテウバツ 物事を識別する力がすぐれてをること。

【有職故實】 イウシヨクコジツ 法令儀式等の古昔の事例を考へ、又之れを

取調ぶること。

【兵馬倥傯】 ヘイバコウソウ いくさのためにいそがしい。

【職原鈔】 シヨクゲンセフ 歴代官職の沿革及び補任の次第を述べたるもの。

【博學洽聞】 ハクガクカウブン 博く學問に通じて、あまねく聞き知れること。

【廣才博覽】 クワウサイハクラン 才學博くして博識なること。

【世の推すところ】 世人のおしたて

いあふぐところ。

【准后】 シュンコウ 太皇太后、皇太后、皇后の三宮に准じて、祿を賜はらしを云ふ。

【蘊奥】 ウンアウ おくぞこふかさこと。

【推服】 スキフク おしたてゝ服従すること。

【一朝】 イツテウ ひとあさ。(少時の間。

【水泡】 スキハウ 水のあわの如くに跡方もなくさえゆくこと。

【心ならずも】 本意にあらざるも。

【慷慨の涙】 時世を思ひて、なげき

かなしむ涙。

【撫養】 プヤウ 手をかけてあはれみ

養ふ。

【水師】 スキシ ふういくさ。(海軍。)

【宮方】 ミヤガタ 皇子がた。

【抄掠】 セフリヤク かすめうばふ。

【奇功】 キコウ すぐれたいさを。

【殊遇】 シユクウ 特別あつき待遇。

【諸成敗】 シヨセイバイ もろもろの政務。

【持明院派】 チメウケンハ 後深草天皇

の系統を有せる派。

【相期し】 アヒキ 互に時を定めて。

【掉尾の勇】 タウビノユウ 最後の勇を奮つたと云

ふこと。

【壯舉】 サウキョ ざかんなるふるま

ひ。

【驚天動地】 キヤウテンドウチ 天を驚

かし地を動かす程、大に世人を驚

すに云ふ語。

【籠城】 ロウジヤウ 城にたてこもる。

【没落】 ボツラク 城地か敵に奪はれ

るゝこと。

【催促に應ず】 サインク うながしたてるさた

に應ず。(召集に應ず。)

【絶代の忠魂】 センダイ 二世にすぐれた忠義

のたましひ。

【天に歸す】 天上にのぼつてしまつ

た。

【邊隅】 ヘンクウ かたすみ。

【鼓舞】 コウ はげまして振ひたゝし

むること。

【義故を糾合し】 キコ 舊き縁故あるもの

などをよせあつめる。

【寒心】 カンシン 肝をひやす。(おそ

れしむ。)

【忠義の精髓】 セイスギ 忠義の精神の心髓。

【乃父乃祖】 ナイフダイソ 父祖と云ふ

に同じ。

【遺風を存す】 キフウ ふるさならはしをの

こす。

【欽すべきなり】 キン 敬ふべきことじや。

三 月雪花

【格別】 カクベツ べつだん。

【大宮人】 オホミヤヒト 宮中に仕ふる

人。

【雅興】ガキヨウ 風雅のたのしみ。

【俚謠】リエウ ざいごうた。

【童歌】ドウカ こどもの謠ふ歌。

【風流】フウリウ 俗氣をはなれて、みやびやかなること。

【泌み込む】シメコム 深く印象をとどむること。

【歴史的因縁】レキシテキインホン 世の變遷を経て來た成立のもとに成立つべきゆかり。

【逕庭】ケイテイ かけはなれの遠さ

こと。

【詩的敎育】シテキケウイク 詩人の風のある敎育。

【眞義】シンギ まことの意義。

【塵世を忘れ】ジンセイヲワスレ 俗世界のことを忘れてしまふ。

【活動社會】カワツドウシヤクワイ いさ

いさしたはたらきをする社會。

【隱遁者】イントンシヤ 世をすて、山林などにかくれたる人。

【名利に奔走】メイリニボンソウ 名譽や利益の爲にか

けまはる。

【利慾に營營】エイエイ 自分の利慾を得る爲に忙がしきこと。

【高尚】カウシヤウ 心のけだかさ事。

【溫雅】ウンガ ものやはらかに、しとやかなること。

【悠揚】イウヤウ ゆつたりとのびあがる。

【神聖】シンセイ とうとくして汚すべからざること。

【無情の物】ムジョウモノ 心なきもの。

【有情化】イウジョウキヤクワ 情のあるものとしてしまふ。

【有徳化】イウトククワ 徳のあるものとする。

【靈瑩透徹】レイエイトウテツ 不思議なほどつややかな光があつて、すまじらう。

【光風霽月】クワウフウセイゲツ 物事に

執着せずして、胸中に煩悶苦痛を

止めず、心高明にして快活なる貌

に云ふ語。

【君子人】クンジンシン 心術善良にして

徳高き人。

【小人邪佞】セウジンシヤネイ 徳少き

こと。

こと。

人の、よこしまにして誠なきこと。

【なぞらへ】 くらぶる。

【影響】 エイキヤウ 関係を及すこと。
(オシヒトス)

【皎潔】 カウケツ けがれなくして、極めてシヤギヤキこと。

【一點塵】 イツテンヂン 一つのちり。

【嚴肅】 ゲンシユク おごそかにしてさびし。

【節操】 セツサウ 心の守りの堅きこと。

【節義の士】 心の守りのかはらざる

男子。

【聯想】 レンサウ 他に伴隨して思ひ出す。

【眺を恣にす】 眺を心の思ふまゝにして、十分たのしむこと。

【民族】 ミンゾク 人民の種族。

【傳説】 デンセツ いひつたへ。

【品性】 ヒンセイ もちまへの性質

【國民性】 コクミンセイ 國民を一貫せる一種特別の性質。

【髣髴】 ハウフツ あたかもそれの如くに。

【鵝の海】 近江の國にあり。(琵琶湖の異名)

【俯仰感慨】 フギヤウカンガイ うつふしになつたり、仰いたりして感じなげく。

四 小品二篇

【立夏】 リツカ 陽曆五月五日なり。

【故兒琴嶺】 ゴシキンレイ 既に死したる我が子の琴嶺にて、琴嶺は作者馬琴の子宗伯のことなり。宗伯は松前侯の鑿員となり、年三十八に

して歿す。

【惛惛】 イフィフ 心むすぼるゝさまに云ふ語。

【懷舊の情】 むかしを思ひ出すこと。

【脆き】 ヒロキ 脆きは人の心なるかな 脆きは碎け易いといふことにて、動きやす

しものは人の情であるよの意。

【しきるもたゆみ】 音の急切に聞えて居つたものがゆるくなる。

【たゆむもまたしきる】 緩くきこえて居つたと思へば、又急切になる。

【雁がぬの砧をさそふにやあらむ】

あの様に砧の音が断続して聞えるのは、雁の聲が砧をさそふのかしらん。

【砧の音の雁がねに通ふにやあらむ】

砧の音が雁がねに通ずるためか知らん。

【あなあやし】 さてもふしぎな。

【打つをりの憂さゆゑか】 砧をうつ時の人の心が悲みがあるにめてあらうか。

【みなあらず】 どれもこれも皆その

理由とはならない。

五 笠置山

【類火】 ルキクワ ともやけ。(類焼。)

【主上】 シユツヤウ 天子のこと。

【宮宮】 ミヤミヤ 皇后、皇子、皇女などを云ふ。

【卿相】 ケイシヤウ 三位以上の公卿。

及び四位の参議を云ふ。(月卿。)

【雲客】 ウンカク 殿上人にて、四位以上の公家及び六位の藏人を云ふ。

(くものうへ人。)

【歩跳】 ホセン かちはだし。

【足にまかせ】 足のむくまゝにすの意。

【関の聲】 衆人一どきに發する聲。

【忝くも】 もつたいなくも。

【十善の天子】 十善をおかさずして十善の徳を備へたまへる天子の意

(十悪は、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不慳貪、不瞋恚、不邪見これなり。)

【玉體】 ギョクタイ 王者貴人の身體を稱するに用ゐる語。

【田夫野人】 テンフヤジン 田夫は農夫

を云ひ、野人は田舎者の稱。

【そこともしらず】 何處と云ふこともなく。

【あさまし】 おどろくばかりなり。

【心ばかりを盡す】 心だけは十分にあせること。

【夢路をたどる】 夢の跡を覺束なく探り求める。(心だよりのなき事。)

【青塚】 セイチャウ 青く苔むせる塚の義。

【寒草の疎なるを】 寒くなつて野の

草の枯れたるなかに、まばらにのこつて居る草。

【御座の菌】^{ギョザ} 天子のまします御座席のふとん。

【羅穀の御袖】^{ラクコク} 羅穀は羅ロ又は紗シヤの類にて、織目の透きたる織物なり。

「羅はよこふとくたてほそき織物。穀はその織目の恰も粃米モミの状したるを以て、又こめありともいふ。」

【ほしあへず】 涙にひびちてほしもをばらずの意。

【とかうして】 どうかかうかしての

意。

【足たゆみ】 足が疲れて力なくなること。だるくなること。

【せむ方なく】 やむことを得ず。(しかたなしに。)

【うつつの夢】 現在あり得べからざる事に遇ひて、其現在をそのまゝ夢とする。

【さしてゆく歌】 「赤坂の地をさして行かんとて。笠置の山を出でよより以來、このひろき天の下に自分の世を忍ぶべき所もないので

あるか、しばしとて立ちよりし松の下でさへ、おつる雫の爲めに、

居る事のかなはぬ心づらさよと」。

歎かせたまへるなり。(ああが下のあめと云ひてより、笠置の笠に縁ある詞の、さすを用ゐさせ給ひしものならん。)

【いかにせむの歌】 「如何がすべき

か、たゞしばしの宿をとて、たのみにして立ちよりし松の下蔭さへ車のために袖をぬらされて居ることとまできない。斯くまでに世を忍

ぶべき所がないのであらうか。」とて御同情申上げたるなり。

【案内者】 アンナイシヤ みちしるべする人。(勝手をよく知りたる人。)

【皇居隠なく】 天子の居たまふ所。即皇居にして、そのまします所は、おのづから人の知るところとなつての意。

【御気色】 ミケシキ 「おかほつき」の意。

【天恩を戴きて云々】 天子の御恩を有りがたいと思つて忠義を立て、

其の功によりて恩命を蒙り、身の榮達を心にあてにせよとなり。

【あはれ】 あつはれ。

【所存】 シヨゾン おもはく。(心中に存するところと云ふ意なり。)

【事の漏れ易くして】 事の發覺し易くして、勤王の道の成就し難くはなさをあそれてなり。

【もだす】 くちをつぐみて言はざること。

【うたてけれ】 けしからぬの意。(薄情なりの意にも。)

【網代の輿云々】 青き竹を細くけづり、あじろを組みて輿に張り、黒塗の押ぶちを打ちたるものにして

親王攝政家大臣などの常にのるべき輿なり、天子のめすべきものならぬに、それさへなかつたと云ふこと。

【張輿】 ハリゴシ 疊の表を張りて包みあしぶちを打ちたる物、略儀のときならでは用ゐず。

【怪しげ】 立派ならざるといふ意なり。(へんな或は賤しさうな。)

【南都】 ナント 奈良の地を云ふ。京都の南方にあるを以て南都と云ふなり。

【殷湯夏臺にとらはれ】 殷湯は殷の湯王なり。夏臺は夏の世に獄を鈎臺といひしを以て。夏の鈎臺の意にて獄の意となる。(夏の桀暴虐無道、諸侯みな畔く。諫者關龍逢を殺すや、湯人をして哭せしめしに、桀怒りりて夏臺に囚へたりと云ふ故事。)

【越王會稽に降ぜし】 越王は勾踐な

り。吳王夫差と戦ひ、夫椒に敗れ、會稽山に棲みて、おのれは臣となり、妻は妾とならんとて、降を乞ひし故事を云へるなり。

【昔の夢に異らず】 人事のはかなきを夢にたとへて、今天皇が六波羅勢のためにもはぬ憂き目に遇ひたまへるは、恰も殷湯の桀に囚はれ勾踐の夫差に降りしと一般なれば、やがて報復の期あるべしとの意をふくめて書けるなり。

六 西郷隆盛に與ふ

の義に用ゐる。よりて人に接するを警戒に接すとは云ふなり。

【幕下】バクカ 大將の麾下より轉じて、將軍の尊稱に用ゐる。

【舊兩の感】クワウイ 故人を思ふの情を云ふ。【懷に往來す】クワウイ 心の中に往來すること。

【故山】コザン 故國故郷など云ふに同じ。

【滄桑の變】サウサウ 時勢の遷變にたとへしなり。滄海變じて桑田となるといへる故事に出づ。

【歸養】キヤウ 官を辭して身を養ふことにて、明治六年十月征韓の議

【旗鼓の間】キゴ 軍陣の間と云ふ意に用ゐる語。(鼓も旗も軍陣に用ゐる具なるが故なり。)

合はずして、郷里に歸りたるを云ふ。

【亡狀】バウジヤウ 無禮なるさまを云

【警戒に接す】ケイカイ 咳は欬に作る、言笑なり。又「しはぶき」「せきばらひ」

ふ詞。(無狀に同じ。)

心。

【巨魁】キョクワイ かしら。

【突如】トツサヨ だしぬけに。

【謀主】バウシユ 主たる謀計者の意。

【明識】メイシキ 思慮分別する力が人より明かなること。

【斥け】シツツ とりあげないこと。

【説者】セツ たててる者。

【勢の止むを得ざる】セツ ゆきがかりのやむことをえなひ。

【不良の徒】フレイ よからぬともがら。

【異圖を懷く】イト 叛逆をはからんとの心をもつ。

【山林に韜晦し】タククワイ 韜晦はわが才徳を包みかくして顯さざることにて、故郷に歸り山中に退隱してあとをくらますこと。

【名なき軍】イナナ 名分の正しからざる軍。

【奇貨】キカ 珍らしきしろもの。

【機を失へる】キ 機會を失つた。

【これによりて】コノ これを道具につか

【公布】コウフ 一般の人にふれる。

【自省の志】ジツ 自ら反省して注意する

【自省の志】ジツ 自ら反省して注意する

【これによりて】コノ これを道具につか

【自省の志】ジツ 自ら反省して注意する

【これによりて】コノ これを道具につか

つてなり。

【僥倖】ゲフカウ まぐれさいはい、

【辭を巧にし】ことばをうまくつか

つて。

【讒誣】ザンプ なきことをありとし

て、善をそしり人をそこなふこと。

(しこづる)

【蒼生を如何にせん】蒼生は青人草

民草などと云ふことにて、萬民と云

ふ意、即ち萬民の苦を如何にしや

うかせんすべなからんと云ふ事。

【靡然】ビセン 草の風の爲にたふれ

臥すが如くに、なびき従ふこと。

【卓識】タクシキ 見識のすぐれたる

こと。

【洞察】ドウサツ みとらす。

【浸潤】シンジュン しみこむこと。人

をそしるに水の次第にひたしおか

すが如くにしていひこめば、聴く

人をして入るをさとらずして信ず

るに至らしむること深し。かゝる

讒誣のしかたを浸潤の諧と云ふ。

【いたす】およばしむること。

【衆口金を爍す】衆口の悪むところ

は、堅き金と雖もこれがために消
亡するを云ふ。(讒言の恐るべきを
云ふなり。)

【單騎】タンキ ひとり馬に跨ること。

【輦下】レンカ 天子の車を輦と云ふ。

輦轂の下といふことにて、天子の

居給ふ都の下の意。(ちひざもと。)

【従容】シヨウヨウ ユるりと。

【上言】ジャウゴウ 上に申しあぐ

る。

【何の妨】サマダゲ 何の故障といふ意。

【壯士輩】サウシハイ わかものたち。

【真相】シンサウ まことのありさま。
人理の大道 人のよるべきすぢみち
の大なるもの。

【履踐】リセン ふみおこなふ。

【才識】サイシキ 才智識見。

【教唆】ケフサ そゝのかす。(誘ひ煽

動すること。)

【不遇】フクウ 不仕合 (時勢に合は

ざるを云ふ。)

【不平の念】ネン 心の満足を得ざる念。

【悲憤の念】ヒボン かなしみいきどほりに

たへぬおもひ。

- 【再轉】 サイテン 再び心がはりがする。
- 【情勢】 ジヤウセイ 事のなりゆき。
- 【故舊】 コキウ むかしよりの知人。
- 【看過】 クワンクワ みすごす。餘生をすう完 生ひさき短き命を無事てくらす。
- 【人生の毀譽】 キョウヨ 世上のそしりとほまれ。
- 【度外】 ドクワイ 範圍の外。(心にとめないこと、又かまはぬ。)
- 【切なり】 キツナリ はなはだしい。
- 【骨肉相食み】 コツニクアヒミ 兄弟互に相争ふこと。
- 【寸毫の恨】 スンガウウラミ スこしばかりの恨。
- 【王師】 ワウシ 天子のみいくさ。
- 【其帥】 ソノスシ その大將。
- 【麾下】 キカ 麾は大將の旗なり、大將に直隸のものを麾下といふ。
- 【軍威】 カンキ 軍の威力。
- 【守戦】 シュセン まもりたゝかふ。
- 【事とせんとはする】 一心に遂げやうとはなさるか。
- 【辭せざるなり】 いなむことをせずしてやつて居る。

七 福原

- 【議す】 評論すること。
- 【實に極れりといふべし】 この上もないと云つてよからう。
- 【國憲】 コクケン くにのおきて。
- 【おのづから然らざるを得ず】 自然とさうなければならぬ。
- 【公論】 コウロン 天下の悉く是とする論。
- 【切に】 たつて。
- 【冀望】 キバウ ねがひのぞむ。
- 【情懷】 シヤウクワイ こころのうち。
- 【治承】 ジンヤウ 高倉天皇の御時の年號。
- 【水無月】 ミナヅキ 六月のこと。
- 【都うつり】 ミヤコ 遷都のこと。
- 【思の外】 イケライ 意外。
- 【おほかた】 おほよそ。
- 【數百歳】 延暦十三年桓武天皇の遷都より治承四年までは三百八十六年なり。
- 【やすからず愁へあへるさま】 心安

くおもはずして、かなしみあふあ
りたま。

【官位に思をかけ】 官途につきたし
と思ふ人。

【とかくいひがひなく】 とにかくい
つた甲斐がない。

【主君の蔭をたのむ】 主君のおひき
たてを蒙らんとするの意。

【御門よりはじめて】 天皇をはじめ
として。

【時を失ひ世に餘され】 時世に用ゐ
られず、のけものにせられた人。

【大臣】 オト、 太政大臣、左右大臣、
内大臣の稱。

【期する所なきもの】 世に出て、官
途につくべき望のない人。

【公卿】 ヲケ 納言及び四位の參議以
上の朝臣の稱。

【愁ひながら】 かなしみなげきつゝ。
【軒を争ひし人のすまひ】 これまで

【世に仕ふる程の人】 世に仕官をす
る位の人。

京都にて、軒を並べて榮華をさそ
つた人の住家。

【日を経つゝ荒れ行く】 日數を経な
がらあれて行く。

海の地をのみ領地とせんことを希
望する。

【家は毀たれて云々】 福原に移さん
とて取りこはされて、淀川を流し
て運ぶを云ふ。

【莊園】 シャウエン 中世以後朝廷より
國々の田園を褒賞として、皇子諸
臣に賜ひしもの。(私領地。)

【人の心皆あらたまりて】 人の氣風
が皆かはつて。

【おのづから事のたよりありて】 自
然に用事の序があつて。

【馬鞍をのみ重くし】 武事のみをた
つとぶ。

【程せまく】 東西南北の距離のせま
きこと。

【牛車を用とする】 牛車を入用とす
る。

【條里を割る】 都城市區の割り付け
をなすこと。(條は北より起りて南
に行くを云ひ、里は西に起りて東

【西海の所領をのみ願ひ】 都近き西

に行くを云ふ。

【かまびすし】 さわがしきこと。

【内裏】 ダイリ 皇居のこと。

【木の丸殿】 柱をけづらず、丸木のまゝにて立てたる殿をいふ。(天智天皇筑紫にみゆきし給ひ、筑前の朝倉と云ふところの山中に行宮を建て給へる時、丸木のまゝにて作らせ給ひしより、これを木の丸殿といひ傳へたり。)

【なかなか】 かへつて。

【やうかはりて優なるさまもありき】

やうはやうすなり。平安城とは見さまのかはりて、優美に風雅なる處もありとの意なり。

【ありとしある人】 居住を定むべきものとしてある人。

【浮雲の思】 浮雲の風のまにまにたゞよひて、東西を定めぬ如く、安堵せざるを云ふ。

【地を失ひて愁へ】 土著の人民は、官人のために土地をとりあげられてなげきかなしむ。

【土木の煩】 建築工事をなすの心配

あるをかなしむ。

【道の邊】 みちのあたり。

【衣冠】 イクワン 常の袍に指貫を著用せる服装なり。王朝時代には公卿朝服の略式にして、通常参代の時に用ゐる。

【布衣】 ホイ 單の絹にて造り、五位以上の人は織物にて、六位以下の人は無文なり。(中世以後の官服。)

【直垂】 ヒタマシ もとは貴人の夜の具なりしが、のち庶人の常服となり、その後また禮服となれり。

【都の手振】 都の風俗なり。

【ひなび】 田舎風。

【世の亂るゝ兆】 亂世となる徴候。

【聞きおけるもしるく】 聞いておいたのも今は目にたつて。

【日を経つゝ】 一日一日にの意。

【浮き立つ】 人心が定まらざるを云ふ。

【民の愁遂に空しからざりければ】

人民の愁歎は、遂にはあだとはならなかつたから。

【ほのかに】 おぼろげにの意(謙辭)

を用ゐたるなり。

【いにしへかしてき御代】 古の聖代にて、仁徳天智などの御代をさせるなるべし。又は堯舜の世をも指せるにや。

【御殿には茅を葺きて云々】 支那の堯の時には、「堂の高さ三尺、土階三等、茅茨剪らず、采椽けづらず。」と云ふことあり。これらを云へるなるべし。

【煙の乏しき云々】 仁徳天皇の故事を云へるなり。

【限あるみつぎ】 制限の定まりたる地方よりの奉れる生産物。

【ゆるされき】 租税を免せられしこと。

【昔に準へて】 昔に比較してなり。

八 藝苑逸話

【繪佛師】 エフツシ 佛像を忍かく法師といふこと。

【おしおほひ】 火勢のために蔽はれること。

【大路】 オホサ はばのひろき交通路。

(大道)

【物もちちかつがぬ】 當時の風俗婦人外出の時は必ずかつぎし、或は笠を著る習なりしを、これは急遽の際なれば、何物をも冠りも着もせずしてなり。

【さながら】 そのまゝ。

【身ばかり】 自分の身のみ。

【出てたるを事にして】 逃げだしたるを、し得たる事にしての意。

【むかひのつら】 向ふ側の意。

【煙炎くゆり】 けむりほのふか燻ぼ

ること。

【さりげなげにて】 然るべき様子もなしなり。(何とも思はぬ風。)

【知音】 チイン 己の心をよく知れる人を云ふ。

【とぶらひ】 火事見舞に訪問すること。

【うちうなづき】 首肯すること。(合點すること。)

【あはれ】 あつばれ。

【しつる所得】 うまいことをした利得たの意。

【年頃】 トシゴロ 年來。

【あさましき】 「たのみがひなし」なり。(あさるし)

【物の憑きたまへる】 妖怪でもついたのかの意。

【何條】 ナアウ 何として。

【不動尊】 フドウソン 五大明王の一なり。不生不滅の法體なるが故に不動といふ。

【和黨】 ヲタウ 汝等の意。

【させる能】 これとさしていふ程のはたらき。

【あざ笑ひ】 あざけり笑ふの意にて

ひやかすことなり。

【よぢり不動】 不動尊の火焰のよぢれたるより云へるにや。又普通のとは異りたる變相の不動尊の意はやとも云へり。

【鳥羽僧正】 戲畫をよくせり。鳥羽繪の祖なり。

【ならびなき】 類例なきの意。

【法勝寺の金堂】 法勝寺は白河天皇の建立にして、東三條森の北三町許にあり。金堂は本堂を云ふ。金を

ぬり、又金箔などちきて金色なる

より呼べるなり。

【いつほど】 いつ頃の意。

【供米】 カマイ 神佛にそなへる米。

【不法】 フハフ 道にはづれたることにて、不都合なりの意。

【辻風】 ツジカゼ つむじかぜ。旋風。

【大童子】 オホララベ 大人の髪ふりかぶとして、小供のさましたるもの。

【法師ばら】 僧侶等の意。

【とりとめむとしたるを】 取り止めて吹きあげらるまじとするさま

を云ふ。

【院】 キン 鳥羽法皇を云ふ。

【御覽じて】 御覽あそばして。

【御入興】 ゴジユキヨウ おもしろがらせたまふこと。

【物の實】 米俵の中の實質のこと。

【さりとはは】 それではならぬの意。

【小法師ばら】 小坊主たちの意。

【比興】 ヒキョウ わが意を物をかりて云ひおこすの意なり。

【沙汰】 サタ 官府よりの命令。

【能因法師】 ノウキンホフシ 有名なる

歌人なり。

【民のなげき】 雨ふらずとて、民のなげきかなしむこと。

【めでさせ給ふ】 いとほしくおぼしめすの意。

【三島】 ミシマ 三島神社なり、伊豫越智郡にあり。

【國司】 コクシ 地方官のことなり。

【あまの川の歌】 あなたは天上にまします神の下りたまへる神と申すこととございます。果してそれに相異なくば、天上にありと云ふ天

の川の水を苗代田ナハシロダにそそぎかくるやうにお下クダしくださいまし。若しそれが出来なければ天つ神とは申されずまいとの意。

【みてぐら】 神に奉るものを云ふ。

【神司】 カンツカサ 神社の祭事とつかさどる人。(神官。)

【炎早エンカンの天】 ひてりのそら。

【おしなべて】 どれもこれも。(總體。)

【唐ヤマトの貞觀テイカンの帝ミカド云々】 支那唐の世の太宗皇帝は、貞觀二年に蝗蟲イナカシ大に

起りて害甚しきを聞き、苑に入り

て禾を視、數個を取りて、「人穀を

以て命となす、而汝之れを食ふ、

是百姓を害するなり、百姓過あら

ば予一人にあり、汝をれ靈あらば、

但まさに我が心を食ふべし、百姓

を害することなかれ。」とて之れを

呑みたまひしに、それより後蝗蟲

また禾を害せざりすと云ふ故事を

云へるなり。

【すき者】 ものずきなる人の意にて歌道に熱心なるをいふなり。

【都をはの歌】 「都を出たのは、春

がすみのたつ時節であつたが、月

日の過ぎゆくは早きものにて、今

や白川の關のあたりは、秋風の吹

く時節となつたわい。」と云ふ意。

【念ネンなし】 さんねんなりの意。

【人にも知られず】 人に見付からな

して。

【籠コモり居て】 外出をせずに居る事。

【修行シュウギョウの次】 佛道修行の爲に、奥州

路へ下つたついでツいでの意。

【披露】 發表すること。

九 天の川

【あら海や云々】 北海の荒海を眺むれば、水天髣髴たる天の一角には、佐渡の島へかけて天の川を横へたらんが如くに見える。」と云ふ意。 壯大豪宕の様想ふべし。

【稻妻や云々】 いなづまの光が、昨日は東に見えしかと思へば今日は西に見える、定めし夕立のくもが、所さだめずあらはるゝのであらうの意。

【しら露やの句】 折角うるはしくおきたる白露も、人馬のためにはらされてしまつた、あれは無分別にもところさだめずおくからである同じおくならば、今少し心して散らされぬ所に、おけばよからうもの意。

【行水の句】 今や秋の中ばにて、どこにもこゝにも蟲聲唧々として、行水の水のすてどころさへないわいと云ふ意。

【かれ枝にの句】 萬木凋落して、時

にやどる鳥の數さへ、明にかぞへらるゝ様になつて来て、いつの間にか秋もくれになつたわいの意。

【三井寺の句】 さてもこよひはいゝ月だ、獨ながめんも心なし。いてや三井寺の僧でも訪うて、共にこよひの月を賞しやうかの意。

【名月やの句】 空もくまなく照りわたる月は、明皎々として月あかりは疊の上までもさしてこんで、松の影さへ座敷のうちになつて居る。かゝる明月を居ながらにして

眺むることの、よろこばしさよとなり。

【欄干にの句】 月皎々たる月下に菊をながめたる、その時のさまを咏じたるなるべし。

【黄菊白菊の句】 菊花園に来て見れば、其種類も一ならず、いろさまざまあれども、黄菊白菊の風韻高くして、いさぎよきにはしくものなしとの意なり。

【化もの、正體の句】 おぼろ月夜に妖怪の如くにおもはれて、心あそ

ろしく思つたが、よく見届けて見れば、それは枯尾花であつたわいの意。

一〇 白峰の陵

【相阪の關守に云々】 相阪の關所の番人に、通行をゆるされてそこを通り過してよりの意。

【濱千鳥のあと云々】 鳴海瀉は尾張國愛知郡にあり。古來千鳥の名所として世に知られたる所なれば、あとふみつくるといへるなり。

【むらさき匂ふ云々】 むらさき草のいろつやはえある武藏野の原なり。

【和ぎたる】 風止みて波靜かなる朝のけしきの意。

【蟹の苦屋】 あまのすむ苦にてふきたる家。

【佐野の舟橋】 上野の佐野にある舟橋を云ふ。

【心とまらぬ云々】 心がそこに止まりて、見たしと思はないところはない。何處も皆心とまるとこ

ろのみであつた。(氣にゐること)

【歌枕】 ウタマクラ 名所のことなり。

寐るに枕をよりどころとするが如く、名所は歌をよむによりどころとなるによると云ふ意より來れるなり。

【葎がちる難波】 難波の地は古來葎多き地なるを以て、葎の花の散るといふ難波といへるなり。

【身にしめつゝ】 身に深く感じながらの意。

【行き行きて】 先さへ先さへと行つ

て。

【新院】 シンイン 崇徳上皇を云ふ。

【陵】 ミササギ 山陵に同じ。天皇、皇后の御墓所を稱し奉る語。

【青雲のたなびく日】 晴れわたたりたる日の意。

【そぼ降る】 しよぼしよぼとふるの意。

【おひのぼる】 下より登山する人をおひかけてのぼるといふ意。

【まのあたり】 眼のあたりの意。(目前。)

【おぼつかなき】 分明ならぬを云ふ語。

【うばらかづら】 茨また葛なり。(荆棘や葛の稱。)

【うらかなし】 心悲しなり。

【心もかきくらすされ】 心中も物思ひの爲めに、くらくみださるゝこと。

【夢現とも分きがたし】 夢とも現在とも、わからざるばかりだの意。

【紫宸清涼の御座に】 紫宸殿、清涼殿の御座所に、(紫宸殿は禁中の正

殿にして、大禮を行はせるらゝ所清涼殿は禁中常の御在所なり。)

【さこしめす】 さくの敬語。

【百のつかさ】 百官。

【御言かしてみ】 天子の仰せごとをおそれつゝしみて。

【近衛院】 コノエイン 近衛天皇は、崇徳天皇の異母の弟にまします。

【藐姑射の山】 仙人の住むてふ山なり。上皇の御所を仙洞御所と云ふ

よりして、仙人の住む所と云ふ意より、上皇の御所を呼ぶ詞となれ

るなり。

【玉の林にしめさせ給ひ】 藐姑射山の玉の林の中に御座所を定めさせたまひて、上皇とならせ給ふを云ふなり。

【思ひきや】 想もよらずとなり。

【麋鹿】 ビロク おほ鹿や鹿といふこと。

【おどろの下】 荆棘の下にの意。

【神がくれ】 崩御したまふこと。

【萬乗の君】 天子を云ふ。

【宿世の業】 前世よりの悪因によれ

る作行。(善惡の報。)

【罪をのがれさせたまはざりしよ】

罪をおのがれあそばすことは出来なかつたことよまあ。

【はかなき】 たよりなきこと。(存在の基たしかならず。)

【思ひつゞけて】 次ぎ次ぎに思ひ出して来て。

【夜もすがら】 終宵。

【供養】 クヤウ 物をそなへて回向すること。(念佛をとなへるを云ふ。)

【誦し】 經文をよむこと。

【松山の浪のけしきはの歌】 松山の

地に、頻繁にひるとなく夜となく浪の打ちよせてくるさまは、昔もいまもかはるはずはないのに、我が君のみはあとかたもなくおなりなされて、誰れまつりたまん人もなきはさて、もあいたはしきことよとなり。(かたなくは、あとかたもなくと、干潟もなくとかけてよみたるなり。)

【神清み神冷を】 心のうちまでもすみわたり、骨までも寒さが透り

【物とはなしに】 何物とはなしに。
【すさまじき心地】 ものすごくおそろしき心もちと云ふ意なり。

一一 文話一則

【喜を敘す】 よろこびの情を述べる。
【上乘】 ジャウツヤリ もつともすぐれたると云ふ義。

【近松門左衛門】 チカマツモンザエモン 戯曲家なり。幼時肥前唐津にありて僧となり、後志を翻して京に入

り、一條家に仕へて従六位に敘せられ、致仕して門左衛門と云ふ。

幼名彦四郎と云へり。

【逸事】 イッシ 世にあらはれざる事柄。

【淨瑠璃】 ジャウルリ 三味線に合はす

る一種の物語。

【含蓄】 カンチク おくぶかき意味をもつ。(ふくみもつ。)

【緊要】 キンエウ 最も大切なること。

【文の語るべき人】 文事の話の出来る人なりの意。

【具體的】 カタイテキ 個體そのまゝを寫象する心的作用を云ふ。

【抽象的】 チユウシャウテキ 個々別々の具體的智識より共通せる屬性を抽出して、これを總合し、以て精神界の現象とする心的作用を云ふ。

【貧窶】 ヒンル まづしくやつるい。

【想像】 サウザウ 既知の事實又は知識を材料として、新しき事實又は知識をつくる心的作用。(おもひみる。)

【漠然】 バクセン ばつとして明かな

らざること。

【晦暝】 クワイメイ まつくらさきこと。

【心動さ】 感動を起すこと。

【瞭瞭】 レウレウ あきらか。

【歸結】 キクツ 物事の最終のひすび。
(しまひ。)

【耳を傾く】 さかんとする貌をいふ語。

【能文の士】 文章に巧なる士。

【真率】 シンソツ かざりなくして正直なること。

【神韵】 シンキン 常人の域を脱して、

神域に達するを云ふ。

【乃父】 ダイフ 「ちち」と云ふこと。

【その主】 土屋侯をさす。上總久留里の藩主なり。

【血に飽さ】 血を十分すひたる事。

【三昧】 サンマイ 一途に心を傾くるを云ふ語にして、凡人の域を脱して、神域に達せるを云ふ。

【索然】 サクセン 興味の盡きて、更に面白味なきこと。

一一一 空論を避くべし

【歸納的推理】

キナフテキスキリ

許多

の事業を集めて、一致の點を求め、

其の中に存する原理を案出して、更にこれより最高理に論及せんとする推理法。

【結論】

ケツロン

論じつめたる結局

の論。

【一致】 イッチ ひとつになること。

【空理空論】

クウリクウロン

實際とか

けはなれたる理や、據りどころなき論。

【流行】 はやる。

【材料】

ザイレウ

物をつくりだすものと、なる品。

【常識】 ジャウシキ 健全なる普通一般の理解又は道義心、常規にはづれず、時代に適應したる識見。

【基礎】 キツ どだい。

【粗漏】 ソロウ てぬかり。(ておち。)

【創造】 サウザウ はじめて造り出す。

【演繹的】 エンエキテキ 既知の原理より漸次論下して、現在の事實に到達し、其の理由を説明すること。

【鄭重】 テイチヨウ 注意深きこと。

【懺悔話】 ヴァンゲバナシ 過去の罪惡を悟りて後悔する話。

【六部】 ロック 六十六部のことなり。

諸國の社寺を巡拜して、法華經を日本六十六國の靈地に納むる行脚僧を云ふ。

【宗教】 シウケウ 吾人が、人生に超越せる崇高偉大なる或るものを畏敬する感情に起因し、これを人格化して崇拜し、信仰し、よりて慰藉安心幸福を得て、以て人生の缺陷を補はんとするものを云ふ。

【哲學】 テツガク 自然人生、及び知識の現實理想に關する、根本的原理の學。

【教育學】 ケウイクガク 人心の作用、現象を説明する心理學を基礎として、倫理學又は社會學等を參酌して、教育に關する諸般の事を研究する學。

一三 讀書の選擇

【涉獵】 セフレフ ひろく書を讀むこと。(涉若、涉水、獵若、獵獸、言歴覽

之不專精也。)

【徒費】 トロヒ くだなることに費すこと。

【煥發】 クワンパツ 明に發すること。

【神饒多】 シンニョタ 精神がゆるみてひきたるること。

【氣阻む】 キハム 氣力のくじけ止まる事。

【頽然】 タイゼン 衰退して振はざる貌。

【生氣】 セイキ いきいきして活動する力。

【覺醒】 カグセイ 目をさますこと。

【秀麗】 シウレイ すぐれて美はしきこと。

【審美の靈光】 シンビレイクワウ 美の本體を思索すれば、靈妙不可思議なる間に、自然の默示を得べし、この美の思索を審美といひ、この靈妙なる默示を靈光といふ。(美醜を識別すべき不思議の光。)

【庶幾くば】 コヒネガハ どうかすると。

【天才】 テンサイ 練磨によらざる獨得の才能。(自然に具はれる才能。)

【名篇大作】 メイヘンタイサク 名のあ

る書物や、大なる著作物。

なすべき務。

【親炙】 シンシヤ 親近して薫炙クンシヤせらるること。

【萬葉】 マンエフ 萬葉集のことなり。

【逍遙】 セウエウ 彼方此方があるさまはること。

萬葉集は雄略天皇の御代より、淳仁天皇の御代に至るまで、凡三百年間の和歌を集めたる書にして、大伴の家持の撰なりとも、又橘諸兄の撰に、家持の撰びつぎたるなりとも云へり。

【警醒】 ケイセイ いましめさせます。

【啓發】 ケイハツ 教導して、その蒙を啓くを云ふ。

【斬新】 ザンシン 趣向の新しきこと。

【源語】 ゲンゴ 源氏物語のことなり。

【涵養】 カンヤウ 漸を追ひて、染み移るやうに養ひなすこと。

【急務】 キフム 主としてまつさまに

紫式部の著にして、光源氏を主人公として、平安朝時代の人情風俗を序述した一種小説なり。

【近松の作】 近松門左衛門の淨瑠璃本の作を云ふ。

【蟻集】 ギシツ ありの如くによりあつまる。

【偏狹】 ヘンケツ せまくかたよる。

【固陋】 コロウ かたくなにして、見識せまきこと。

【鑑賞】 カウシヤウ めきしをして、たのしむこと。

【反故】 ホゴ 書畫などの不用となりたる紙。

【機會】 キクワイ はづみ。(よきをり。)

【淘汰】 タウタ 淘はゆること、汰はよなぐと訓じ、ゆり動して撰みすつるなり。

【散佚】 サンイツ ちりはふるること。

【虚名】 キヨメイ 實なき名。

【野卑】 ヤヒ ひなびていやしき事。

【博す】 とりうること。

【嗜好】 シカウ たしなみこのむ。

【範圍】 ハンキ 区域内。

事の俄なるに云ふ語。

【敷演】 シエン おしひろげてのべる。

【異状】 イジャウ かはりたるさま。

【推敲】 スキカウ 詩句を鍛練すること。

【拮据】 キツキヨ ほねをりつとむる。

と。

【手録】 シュロク てびかへ。(心覺に書さおきたるもの。)

【没趣味】 ボツシユミ 趣味なきを云ふ。

ふ。

【心を苦め候】 心をいためました。

【時弊】 ジヘイ 當時の弊害。

【成就候へば】 てきてしまつてを。からの意。

一四 室鳩巢に與ふ

【是非に及ばず】 やむを得ないことだの意。

【書籍を頼みて云々】 博く書を讀みても、拘泥せず、考慮を費すべし。の意。

【火急】 クラキフ 火のもえたつ如く、

【令郎】 レイラウ 御子息様など云ふ

こと。

【あながちに】 しひて。

漢に至る間の史實を書きたるものにして、本紀世家列傳の三つに區別せり。百三十卷あり。

【俗輩】 ソクハイ 世上の俗人たちの意。

【漢書】 カンシヨ 班固の撰なり。前漢十二代の事を記す。

【買田問舍】 バイテンモンシャ 田地を買

【恩賜のもの】 將軍より賜はりたるもの。

つたり、家宅のことを心にかけたりして、身の安逸をねがふこと。

【某】 ソレガシ 拙者など云ふに同じ。

【四書】 シシヨ 論語孟子大學中庸を云ふ。

【史記】 シキ 漢の司馬遷の撰なり、

上は軒轅氏に始り、下は前漢の天

【くちをし】 残念なりの意。

【心あきなく】 隔心なく。(ゑんりよなくの意。)

【廉潔】レンケツ じさぼらずして、心のいんぎよきを云ふ。

一五 成吉思汗

【尋常同門】ジンジャウドウモン 世の常の同門の門弟。

【黃禍論】ワウクロロン 黄色人種が他人種を侵害すると云ふ論。

【秦風に云々】 秦風は秦の國風を歌へる篇の名なり。其の章に、「豈に衣なしと云はんや、子と袍を同らす、王こゝに師をおこす、我がたてほこを修め、子と仇を同らせん。」とあり、一つの袍を互にかへあひて衣るほどに、苦樂を共にする交りと云ふ意。

【有史以來】イウシイライ 歴史あつてこのかた。

【秦風に云々】 秦風は秦の國風を歌へる篇の名なり。其の章に、「豈に衣なしと云はんや、子と袍を同らす、王こゝに師をおこす、我がたてほこを修め、子と仇を同らせん。」とあり、一つの袍を互にかへあひて衣るほどに、苦樂を共にする交りと云ふ意。

【有史以來】イウシイライ 歴史あつてこのかた。

【霸圖】ハト 大名頭たらんとの計畫。

と。

【こもごも】 かはるがはる。

【規模】キボ かまへ、かた。

【兵機】ヘイキ 兵を用ゐる機會。

遊牧民 イウボクミウ 牧畜を業とし水草を逐うて居を移す民。

【霸業】ハゲフ 大名頭となるの業。

【酋長】シユウチャウ 蠻族の長。

【識略】シキリヤク 知識才略。

【一角】イツカク かたすみ。

【一世に絶し】ゼツ 其の時代にかけはなれて、すぐれたること。

【擴大】クラクダイ ひろくおしひろげて大きくすること。

【駕御】カギョ つかひまはす。

【隸屬】レイゾク 他人の支配に従ひて部下となること。

【己を持つ】 自分の心のもちかた。

【部落】ブラク 一地方の人民の集團せる地域。

【人待つ】 人をあつかふこと。

【軍紀】ケンキ 軍隊の紀律。

【縮盟】テイメイ 約束をかたく結ぶこと。

【精兵】 セイヘイ えりぬきの究^{ツツキヤウ}竟なる士。

【威望】 キバウ 威光と徳望と。

【隆隆】 リユウリユウ さかえゆくさまに云ふ語。

【凱旋】 ガイセン 凱歌をあげてかへること。(戦に勝つてかへる。)

【無辜】 ムコ つみなきもの。

【屠^{ホツ}り】 殺戮すること。

【風^{フウ}丰】 フウバウ 風姿の立派なるさま。

【魁^{クワイ}偉】 クワイキ からだの人なみす

ぐれて、たくましさこと。

【風采】 フウサイ その人のやうす。

一六 武士道

【尙武】 シヤウブ 武徳をたふとぶといふこと。

【胚胎】 ハイタイ 孕^{ハツ}むことより轉じて、事物の起原の義とす。

【支配】 シハイ とりしまりてをさめる。

【道義】 ダウギ 正しさすぢみち。

【實行に伴ふ一種の氣象】 道義的知

識の實行につれられたる一種の愛國忠君の氣象といふことにて、實行とは武力の實行を云ふなり。

【儒教】 シュケウ 孔子の説きはじめてたる教にして、論語を中心としたる、四書五經を經典として用ゐる教。

【禪】 セン 静慮^{セイリョ}又は定の義^{ツキウ}なり。慮を静め、心を明にして、理に達すること。

【三種の融合^{ユウガフ}調和】 わが國にては、太古より君臣父子の大義名分明な

りしを、更に儒教の道義と合體して、更に道念を堅固にする禪と合して、一種の氣象を生じたるなり。融は鎔なり、和なり、とけて一つになつてとのひやはらぐを云ふ。

【人倫の變】 父子君臣兄弟夫婦朋友の間に起りたる、不時の出來事といふこと。

【秋霜烈日】 秋の霜の甚しく冷さを感ずる如く、又夏の日の烈しきあつさを感ずる如く、物のちごそかにしてはげしさを云ふ語。

【ストア哲学】 希臘羅馬の地に一時勢を得たる學說にして、倫理宗教を中心としたる哲學なり。爲學の目的を純窮理的におかずして、實踐的に置けり。教理は天然に従うて、生活せよといふ主義にして、若し此の世に生存して利益なきときは、自殺を以て生存するよりも善なりと教へたり。

【騎士風】 キシフウ 歐洲中世紀時代に起れる風習にして、騎士の徳あり位あるものは、信を守り、名を

重んじ、心寛に、禮厚く、弱者を窘むるものを助け庇ひたる一種の習制をいふ。

【到底】 タウタイ 「とても」と云ふ意。同日の談にあらず 兩者の隔り甚しくして、一樣に對比して論ずべからずとの義なり。

【外國に於ける數度の戦争】 明治二十七八年戰役、同三十三年の北清事件、同三十七八年の戰役をいふ。

【勳功】 クンコウ 國家又は君主にくしたる功勞。(いさをし。)

【封建制度】 ホウケンセイド 大名に封

土を與へて、其子孫をして之れを世襲せしめ、一定の制限以外は、其封内の政治は、おのゝく隨意に取扱はしむる制度を云ふ。

【壊滅】 クワイメツ これは失する事。

【形骸】 ケイガイ からだかたち。

【運用】 ウンヨウ はたらかして、用ゐること。

【志士】 シ、社會の爲に盡す人を云ふ。

【任務】 ニンム じぶんの引きうけた

る役目。

【扶翼】 フヨク たすくこと、扶はたすけて倒れぬやうにする意。

【異端】 キタン 武士以外の種々の教義をいふ。武士道を害するものすべてを云へるなり。

【撲滅】 ボクメツ うちほろぼす。

【間斷】 カンダン 間のとぎるゝこと。

【成功】 セイコウ 事の成就(シヤウジュ)するを云ふ。

【科學的知識】 系統なき個個の事實の知識にあらずして、一般原理に

よりて證明せられ、かつ概括せられたる智識を云ふ。

て、ささなる兵に阻止せられて、あつること。

【精確】セイカク こまやかにして、たしかなること。

【小袖】コソデ 常の衣の稱。(後は絹布の綿入のみをいへり。)

【鋭利】エイリ するどくして、よくきること。

【いたはりて】 ふびんをかけてなくさめてやること。

【果斷】クワダン 決斷のよきこと。(おもひきりのよきこと。)

【馬を引き】 馬を引き出して與ふること。

一七 如意輪堂

【霜月】シモツキ 十一月を云ふ。

【物の具】 甲冑のことなり。
【色代】シキダイ 禮を正して、會釋すること。

【堰さちとされ】 橋上に追撃せられ

【心を通ぜむことを思ひ】 心を楠氏

の方によせること。

【周章】シウシヤウ あはて安んぜざる貌。

【兩度の合戦】 一は八月に正行七百

【熱湯にて手を洗ふが如し】 手に熱

餘騎を以て細川顯氏の兵を河内の藤井寺に破れる戦にて、一は阿倍野の戦なり。

【京勢】キヤウセイ 北朝方の軍を云ふ。

【むげに】 むやみに。(非常に。)

【末末の源氏】 源氏の末裔のことなり。

【蜂起】ホウキ 多くの蜂のとび起つ如くに群り起るを云ふ。

【左兵衛督】サハウエノスケ 足利直義を云ふ。

【催勢】モヨホシセイ 催促してよびあ

つめたる軍勢。

【執事】 シツジ 將軍輔佐の職なり。

【雲霞の如く】 軍勢の多きことの形容語。

容語。

【帶刀】 タテワキ 舍人の武藝に長じたるものを選抜して、兵仗を帶せしめ、東宮に侍衛して、非常を警衛せしめたるもの。

【庭弱の身】 庭は「チヒサシ」と訓する字なり、威勢もなくかよはき身と云ふこと。

【大敵の威】 北條勢の勢力つよきもの意。

の意。

【宸襟】 シンキン 天子のみ心の義。

【逆臣】 ギヤクシン ひほん人。

【扶持】 フチ 「たすけもつ」にてせむをしてやること。

【君を御代に即ち參らせよ】 勢力を挽回して天子をもとのと位につけておあげ申せとなり。

【手を碎さ】 さまさまに手段を用ゐて。

【武略】 ブリヤク 軍事上の才能。

【いひがひなし】 口をそへて云ふ甲斐なし。(ふがひなし。)

【有待の身】 無常の身。(一説には後來事をなさむと、時機を待つ身の意にも云ふ。)

【早世】 サウセイ わかじにすること。

【驅け合せ】 互に乗馬をよせ合せて戦ふ。

【身命をつくし】 命のあらんかぎりをつくし。

【雌雄を決す】 勝敗を定むること。

【今生】 コンシヤウ 現在の世と云ふ意。

【龍顔】 リウガン 天子の御顔。

【參内】 サンダイ 内裡へ參上すること。

【傳奏】 デンソウ 武家より願ひ出づる事を、傳達奏聞する職。

【直衣】 ナホシ 貴人の着用する略服。(常衣。)

【南殿】 ナンテン 紫宸殿を云ふ。

【照臨】 セウリン 諸卒を御覽すること。

【叡慮】 エイリョ 天子の思召。

【憤を慰す】 ごむねんをなぐさめは

らす。

【累代】ルキダイ 代々の意。

【かへすがへす】かさねがさね。

【天下の安否】一國の安らかになる
と否らざるを。

【手を下すへさにはあらず云々】此

方より彼れ此れと指圖すへさには
あらずれども意。

【時を失はず】時機を失はずと云ふ
意。

【後を全うす】後圖をなして安全を
はかる。

【股肱】コカウ ももともひぢとも思
ひてたのみとす。

【とかくの敕答】かれこれの御答の
意。

【最後の参内】最終の参内。

【思ひ定】かくごをする。

【新發意】シンボチ 新に佛道に歸し
たるもの、稱。

【一足も引かす】一步もあとには引
かない。

【先皇の御廟】^{オノミヤ}後醍醐天皇の御廟と
いふこと。

【過去帳】カワコチャウ 死人の名を記

すへさ帳面のことにて、壁板を過
去帳としてかくこと。

【かへらじとの歌】梓弓はいるの枕
詞なり。入るに射るをいひかけ、

死にて歸らざるに矢の反らざるを
いひかけたるなり。さて意義は生

きてかへることあらざるべしとは
前をよりかくごをして居ることな

れば、はならたる矢のかへらざる
が如く、自分も此度の合戦には、

いさぎよく戦死を遂げて、名を史

上にとゞめんとなり。

【逆修】ギャクシユ 死なざる前に、

あらかじめ自分の爲に、佛事を修
めて、死後の冥福をいのるをいふ。

【おぼしく】おもはれて。

一八 人臣の道

【王土】ワツド 帝王のしろしめす地。

【生まれ】包擁せられての意にて、
王土にありて生活するといふ意な
り。

【高名】カウミヤウ てがらいさをし。

【その迹を憫び】 戦死をしたり、功を立てた人たちの子孫を不憫におぼしめして。

【さほひ争ひ】 競争して功をいひたて、恩賞の不足をかこつこと。

【過分】 クラッパン 身分不相應のなり。

【自ら危むるはし】 自分の身を危くする端緒。

【前車の轍云々】 前車の通つた車のあとを見て、後より行くべき車の教訓とする。

【あり難き云々】 なかなかにはむづか

しい世のならばしといふ意。

【中頃】 ナカゴロ 中世の頃。

【豪強なるを云々】 あまりに武勇に誇るものを戒むること。

【制符】 セイフ 禁制の官符の意。

【宣旨を賜はりて】 救旨をうけてなり。

【かたらはるゝ】 語らひとらるゝ意

にて、相對の上にて従行すること。

【今までの亂世の基】 武人漸次に家

人をかゝへて、勢力を得、武門政

治の基を開きて、亂階をつくれり

となり。

【ことわざ】 世俗に云ひつたへたる詞。

【かけあひ】 前課如意輪堂のところにあり。

【家子郎従】 イヘノコラウジウ 一門のものや、家來のもの。

【節に死ぬ】 節義の爲に戦死すること。

【足るべからず】 不足なりとの意。

【さまで思ふことはあらじなれど】

日本全國をたまたまへなど云へるは、

それ程の事ではあるまいなれど。

【亂るゝ端】 亂世の端緒。(亂階。)

【朝家のかろがるしさ】 朝権のかろくして、威嚴なきことを云ふ。

【言語は君子の樞機】 樞は戸の「く

るゝ」、又は「とぼそ」など云ふ義、機は「發動のよる所」とありて、物のうごくもと「ひきがね」など訓す

大切なる器械の意。

【あからさま】 かりそめにもの意。

(苟且。)

【堅き氷は云々】 堅き氷は一朝にし

て来るものにあらず。わづかに霜のふる頃より、その下地をして、漸々に堅氷となるなりとの意。

【亂臣賊子】ランシンソクシ 邦家を亂し、君父を賊ソコナふ者。

【そのはじめ心詞云々】 だしぬけに弑逆を行ふものでない。そのはじめは僅かなる心言葉を不謹慎にして、君父を輕蔑するより、遂に習性となりて、大逆の罪を犯すに至るとなり。

【末世】マッセ 上代を理想の世とし

て、今をなりくだれる末の世となせるなり。

【許由】キヨイウ 堯の世の人にして、箕山の下に住める隱者なり。

【巢父】サウホ これも此頃の隱者なり。

【五臟六腑】ゴザウロツプ 肝、心、脾、肺、腎を五臟と云ひ、大腸、小腸、膽、胃、三焦、膀胱を六腑と云ふ。

【思ひならはせる】 習慣と云つたの意。

【行末の人の心】 後世の人心。

【あさまし】 呆トキるゝ意。

【恩に誇る】 朝恩を受けて榮華に誇る意。

【なかか顧みざらむ】 どうして顧みずしておかれやうかの意。

【萬姓の主】 天下萬民の主といふこと。

【しらせ給はむ】 土地を領して、統御したまふのであるか。

【謀反】ムホン 至尊を害せんことを謀るを云ふ。

【見も懲り】 見てもこりるの意。

【かくのみになりにたれば】 斯くの通りにのみなつたからして。

【謀を帷幄の中にめぐらし】 帷も幄も幕の類なり。將軍の居るところは幕を張れるが故に、將軍の左右にありて謀計をめぐらすを云ふなり。

【勝つことを千里の外に云々】 帷幕の中にありて、軍兵の指揮をなし以て千里の外にめる戰士の勝を決するをいふ。

【追討】ツキタウ うつてをさしむけ

ること。

【下文】クダシテミ 古昔官府よりの命

令書。

【剛の者】^{ガウ} 剛勇なる者の意。

【一所】^{ヒトツドコロ} 一箇所の領地の意。

【いみじき】 いちじるしくすぐれたりの意。

【をかし】 面白しの意。

【おとし奉り】 輕蔑すること。

【身を高くす】 自分をゑらいもの、やうにいひなすをいふ。

【ありし世】 昔の世。

【風儀】^{フウギ} ありさま。

【公家】^{クゲ} 朝廷のこと。

一九 はれぬ雲

【うへのをのこ】 殿上人を云ふ。

【題をさぐる】 自己の感想をのべんとする歌の題を、あれやこれやと求め定むるをいふ。

【都だにの歌】 五月雨時といふものは、都の中でさへうすぐらくして氣も晴れず、心さびじきものなる

に都はなれた吉野のおくにては、一きは氣もむすぼれて、さびしさもまされりとなり。

【鳥のねにの歌】 御垣守^{ミカキモリ}が鳥甲を著て、火危し火危しとて夜廻りをする聲におどろかされて、寝さめがちなるまゝに、心靜に民の上を思ふとなり。(鳥の聲は、一説に鶏の鳴く聲にの意にも解せるものあり。

【身のよそにの歌】 自分の身は出家して、世の中の事にはたづさはら

ない身なるに、世の人に別れて山に入りて後にも、こひしくしたはるゝは、紫宸殿の南階の下にある花を見て、歌など詠みし昔のことであるわいの意。

【あやめひくの歌】 五月五日には、菖蒲枕^{アヤメマクラ}とて菖蒲を五六寸ばかりに切り、そをつがねて兩端を紙捻にて結び、蓬^{ヨモギ}をさして枕とすると云ふ習俗があるが、今日はその菖蒲を引くてふ五月五日であるからして、今宵ばかりは草を枕とする旅

の道中にあるもののみならず、都
の中でも草を枕とするであらうと
想像せらるゝとなり。

【文貞公】 藤原の師賢の諡なり。

【めぐりあふの歌】 離別といふこと
は、つらきものなれば、もし此の
世にて、共々に別るゝことあり。
て、又めぐり逢ふことのならぬが
前世の約束にてあらんには、かへ
つてそのつらきを見はてぬうちに
死にはてんこそ願はしけれとな
り。

【けふのみとの歌】 けふを限りの命
にて、明日はなき數にいるべき短
命のわが身が、このはかなき夢の
世の中にて、今都を出て、この瀬
田の長橋をわたるは、實につらき
ことよとなり。

【故郷にの歌】 故郷にかへつたから
とて、いまはまた昔語をする友も
ないであらうとなり。

二〇 道徳と法律と

の關係(その一)

【風教】 フウケウ 道を以て下のもの
みちびきをしふること。

【觀念】 カンネン 心に考へ思ふ意。

【唱道】 シヤウダウ 人のさきにたつて
となへること。

【弊風】 ヘイフウ 悪しき風俗。

【權利】 ケンリ 法律によりて、人の享
受する利益にして、物事を自由に
處分し得る分限を云ふ。

【義務】 ギム 法律が規定して強制せ
る行爲、又は不行爲の稱。

【主張】 シュチヤウ いひはる。

【刻薄】 コクハク 殘忍にして、人情の
なきこと。

【度外】 ドクワイ 範圍外におくこと。
(すておきてかまはないこと。)

【倫理】 リンリ 行爲の善惡正不正を
判定する標準を研究したるもの。

【道徳】 ダウトク 善なる意思により
て善なる行爲をなすこと。

【要求】 エウキウ しひてもとむるこ
と。

【標準】 ヘウジユン 「めあて」又は「か
た。」

【干渉】 カンセウ たち入りて物事に
せわをやくこと。

【條項】 テフカウ 箇條(かどかど)。

【侵害】 シンガイ おかしそこなふ。

【理非】 リヒ 道理に當れるか否らざるか。

【法廷】 ハウテイ 裁判官の訴訟を審理する所。

【安穩】 アンチン おだやかなること。

【非難】 ヒナン 缺點過誤などをとがむること。

【紛争】 フンサウ あらそひ(もつれ

ごと)。

【私法】 シハフ 私人相互の權利義務を規定したるもの。(民法商法等)。

【公法】 コウハフ 權力關係を規定したる法。(憲法行政法刑法等を云ふ)。

【治者】 チシヤ 權力を有して他を治むるもの。(主權者)。

【被治者】 ヒチシヤ 治者の統治を受くるもの(稱(臣民))。

二二 道德と法律と

の關係(その二)

【裁可】 サイカ 君主が臣民の奏議などを許可したまふこと。

【局に當る】 事にたづさはりて居る人。

【間然】 カンゼン 善惡をいふべき餘地のあること。(異義あること)。

【行政官】 ギヤウセイクワン 行政事務にあづかる官吏。

【主權者】 シュケンジャ 國家を統治する最高權力者のこと。(天子)。

【秩序】 チツザヨ 事物の條理及び次第。

【紊亂】 ビンラン みだる(こと)。

二二 忠度と俊成

【童】 ソラハベ 召仕の兒供のこと。

【ほとほと】 物をたたく音にいふ語。

【門をば開かれ候ひそ】 門をばあけたまふな(意)。(落武者なればなるべし)。

【この際(キハ)まで】 門の傍までの意。

【その人ならば云々】 忠度であるならば苦しくはあるまいの意にて、忠度は俊成につきて和歌をまなび

師弟の間柄なればなり。

【装束】 シャウソク みたたくの意。

【紺地の錦の直垂】 紺色の錦の直垂

なり(鎧の下につくる鎧直垂)。

【小具足】 コケソク 腹巻、籠手、臍當

を著したるだけにて、鎧を著けた

るにはあらざるを云ふ。

【事の體】 事のありさま。

【申し上げたまはり云々】 年來御教

授を受けて居つてその後。

【常家】 タウケ 平家をいふ。

【疎略を存せず云々】 おろそかには

存じて居りませぬが、さりながら
の意。

【参り寄る】 御たづね申すの意。

【救撰】 チョクセン 天皇の救命により

て、撰述すること。

【沙汰】 サタ うはさの意。

【君既に云々】 天皇が既に都をもち

させたまふ上はの意なり。

【沙汰】 サタ この沙汰は、命令の

意に解す。

【さりぬべきもの】 相當のものゝ意。

【御恩を蒙り】 おかげをもつて。(救

撰集の中に撰入の恩を蒙りしの意
を云ふ)。

【遠き守云々】 幽冥の中より守護し

まゐらせんとなり。

【鎧直垂】 ヨロヒロタマレ 鎧の下に着

くる直垂。

【かかる忽劇の中云々】 一門都をお

ちゆくと云ふやうなるいそがしき

場合にも、和歌の道を中心にかけ

ち忘れなされない御志といふ事。

【ありがたく存じ候ふ】 ならび少し

の意。(世にあること稀なりの意)。

【承り候ひぬれば】 撰者たるべき仰
を蒙りて居るからしての意。

【疎略を存せずべからず】 おろそかに

は致すまじの意。

【來世】 ライセ ささの世。

【前途程遠云々】 唐使のかへるや、

前程甚だ遠くして、さして行く雁

門山のくれ行く雲にかけて思へば

跋涉の勞察するに餘ありの意。(雁

山は西京より胡地に越ゆる間にあ

り、山高くして雁の越えわづらふ

故に、峰をさりひらきありと云ふ)。

此きり開き處を雁門といふとぞ。

【志切にして優なりければ】 志は情がせまりて優美なればの意。

【救勸】 チョクカン 救命によりて、おしかりを受けたるを云ふ。

【世におそれて】 世を憚りてなり。

【さゝなみの歌】 さゝなみは滋賀の枕詞なり。さて歌の意は、滋賀の都のあとにかく荒れはてたれど、山櫻のみは、昔繁榮したる時のまゝの色にて、今もなほさかりに咲いてあるとなり。

【朝敵】 テフテキ 朝廷に敵對する反

賊の意。

【仔細におよばず云々】 彼れ此れいふまでもないことじやとは云ふもの。

二三 知己難

【知己】 チキ 善く己の心を知れる人と云ふ意。

【仲達】 チウダツ 支那三國時代の魏の人にして、司馬懿の字なり。

【空營】 クウエイ 空虚なる陣營。

【按じ】 字典に考驗なりとあり。かんながへてみることを。

【天下の奇才】 天下にすぐれたる才能の意。

【玄德】 ケントク 劉備のことなり。

【著すれば】 執著すること。(思ひこんで忘れざること。)

【竹馬の友】 幼少時代よりの友の意。

【同窓の友】 室を向うして學べる友の意。

【同臭味の友】 おなじくさみの義に

て、同類同志など云ふ義なり。

【君ならての歌】 この梅の花は、貴君ならずして誰れに見せやうぞ、見すべき人はない、梅のよき處なる色をも香をも、何事も辨へのある人がよく知つて、見わけ聞きわけるのであるぞ、貴君こそその色香を知る人なれば、今この花をおくるのであるとの意なり。

【鍾子期死して云々】 鍾子期伯牙共に支那戰國時代の人なり。伯牙は琴を彈ずるの名手なり。伯牙琴を

鼓して、志高山にあれば、子期曰く、善いかな魏々として泰山の如しと。又俄にして志流水にあれば、子期亦曰く、洋々として流水の如しと。子期死して伯牙琴を破り、絃を絶ちて、また琴をひかざりきといふ故事。

【荆軻死して云々】 荆軻は戦國時代の人なり。衛人にして燕に移り、燕の太子丹の請を諾して、秦の始皇帝を刺さんとして成らず、遂に殺されたり。高漸離は燕の擊筑の

名手なり。荆軻の友人なりしが、軻死にて後、姓名を變じて潜伏せしが、始皇の聞くとおろとなり。召されて始皇に謁す、始皇その名手なるを惜み、目をふすべて、左右にありて筑を撃たしむ。高漸離親近せらるゝを待ちて、鉛を筑中におき、筑をあげて始皇を打つ中らずして誅せられたりとの故事。

【憐むべき】 同情すべきの意。
【詩家清景在新春云々】 詩人の賞する瀟洒たる好風景は、まだ春にな

つたばかりの時、柳の木がわか芽を出し、鶯鳥の嘴の如き黄色なる芽が、未だ出そろはざる時が最も賞すべき時であるのだといふ意なり。

【茫洋として云々】 ぼのかにして、ひろびろしたる虚空の間をさはめて、日月に接近するをいふ。
【胸間の神祕】 胸の間の秘密と云ふ意。

【若待上林花似錦云々】 上林は天子遊息の處なり。もし盛春の頃、天子遊息の禁苑の花が、錦を織れるが如くなるを待ちて賞せんとならば、門を出て、散策する程の人は皆悉く花見の人ならむ詩人の詩人たる處はないと云ふことなり。

【會得】 エトク 心にさとり知ること (のみこむ)。
【半身以上】 ハンシンイジヤウ 人事の半分以上といふ義。
【重辟】 チュウヘキ おもき罪科。
【是處青山可埋骨云々】 コノトコロセイザンホネチカヅムベシ 此の處の青山

には、骨をうづめても別段をしくはないが、おまへと別れたならば、再び面會するの期はなからう、他

日夜雨の蕭々として降るときなどは、汝は獨心をいたましむるであらう、吾が死ぬのはかまはぬが、

汝が心を傷むるかと思へば、それが心がしりだとの意。

【與君世世爲兄弟】

キミトヨ、ケイテイ

タリ 汝と吾れとは現在の世のみならず後の世までも世々兄弟となりて、その現在の世における未了

の縁を、來世においても結ばうぞよと云ふ意なり。

【恩愛】 オンアイ こまやかなる愛情。

【古往今來】 コワウコンライ 古より後の世に至るまでの意。

【生面】 セイメン 初めてあつた人の事。

【交感】 カウカン 感情を相互にかはす。

【時を問はず處を論ぜず】 如何なる時でも、如何なるところでもさしかまひはないの意。

【賈生が屈原を慕ひ】 賈生は前漢の

賈誼なり。屈原は楚人なり。讒にあひて王に疎んぜらる、屈原忠言の聽かれずして斥けられしを怨みて、懷沙の賦を作り、石をいだき汨羅に投じて死す。後賈誼湘水を渡り、書を投じて屈原を弔ひさといふ故事。

【孟軻が孔子を慕ひ】 孟軻が孔子の道を稱道したるをいふ。

【孔子が周公を慕ひ云々】 周公は名は旦武王の弟にして、周業を興す

に功ありし人なり。孔子周公をしなふのあまり、少時はしばしば夢にまで見たが、今ははや衰えたと思えて、夢にさへ見ることを得ざるに至つたとなり。

【濃到】 ノウタウ 情のこまやかに到れるを云ふ語。

【キケロ】 羅馬人にして哲學者なり紀元前六十三年執政となりしが、後暗殺せられたり。

【スキピオ】 羅馬の名將なり。

【余に對して】 その前後の詞は、(朋

友は眼前にあらざるも猶存在す。貧しきも猶富む。弱きも猶健全なり。而して死せりと雖も猶生く。余に向つてはスキピオ猶生けるが如く、而して彼れは常に生けるなり。如何となれば余はその人の徳を愛し、而してその徳の光は決して消失せざればなり」とあり。

【知己ありて以て繋ぐ】 知己ありて以て人と人との間をつないで、心の荒涼たるを得ずとなり。

【荆棘】 ケイキヨク 「しばら」といふこ

とにて、趣味なくしていとふべきにたとへたるなり。

【犠牲】 ギセイ 天地宗廟を祀るの生贄なり。色の純なるを犠とし、トして吉を得。いまだ殺さざるを牲といふ。或るものを攫得せんがために、まづこのものを棄つるをいふ。(己の身をすて、人を救ふを犠牲となるといふ。)

【區區】 ヲ、小なる貌。

【名利】 メイリ 名聞利慾といふことなり。

【人生感意氣云々】 シンセイイキニカンズ

人の世にたつや、各々その心立てに感じて己の生命をもすつるに至れるなり。功名や勢利の如きは、誰かまたいふものがあらうかの意なり。

いふ義。

【千古の懐を敘す】 幾年の後までものこるべきおもひをのべる。

二四 桃李不言

【深奥なる思想】 おく深きかんがへ(思想とは、経験と思考とによりて生ずる、意識の状態を云ふ。)

【吐露】 トロ かくすところなくしておもふまゝを述ぶるをいふ。

【清福】 セイフク けがれなき幸福と

【桃李言ハザレドモ云々】 桃李は花實あるを以て、自ら銜はざれども、人争ひて歸趣し、來往絶えず其下自ら蹊をなす。徳ある人は、黙して潜みをも、人おのづから歸服するにたとへたるなり。

【水至ツテ清ケレバ魚ナシ云々】 水

が至極すんで居れば、かへつて魚はすまない、人は至つて明察なれば、人に疾畏せられて、孤立となり、與黨なきに至るべしとなり。

【瓜田ニ履ヲ納レズ云々】嫌疑を避くるに喩ふるなり。文選の註に「納は取なり。履を取らば瓜をぬすむかと疑はれ、冠を正さば李を盗むかと疑はる。」とあり。

【道邇シト雖モ云々】荀子修身篇にある語なり。意聞えたれば解せず。【恒産ナキ者ハ云々】恒は常なり。

産は生業なり。常の生業なきものは、人常に有する所の善心なし。士は學びて義理を知る故に常の心あり。民は然らず。故に恒産あらしむべからざるなりと云ふ意。

【心ハ小ナランヲ欲ス云々】心は細心の用意なければ、事のやぶれを來す恐れあり。志は遠大ならざれば、成るところ稱するに足らざるべく、智はまどかにして變通することなければ、物に凝滯する恐あり。行は方正ならざれば、守ると

二五 棧の記

ころなくして、不義に陥るべしとなり。(心小は畏敬をいひ、志大は敢爲をいひ、智圓は變に通ずるをいひ、行方は守るところあるを云ふなり。)

【普天ノ下云々】土の廣くして民の衆きを云ふなり。

率は循なり。濱は涯なり。普は循なり。天のあまねく覆ふところの下、地の長くつゞける限り、ことごとく王土王民にあらざるなしとなり。

【あくがれ】心をころにうきたつこと。

【桃源】タウゲン 支那湖南省武陵縣にありと云ふ、秦の亂をさけたる民の住める所なり。溪の兩岸桃花を以て夾み、芳華鮮美にして落花繽紛たり。林つさて山あり、山小口あり、これを出づれば豁然として土地平曠、良田美地多しと云ふこの絶境を桃源といふ。

【背戸】セト うらぐち。(裏の出入口の意。) 【かふせかゝる】 上より物を被らすこと。

【馬の背やの句】 馬上ゆたかに夢をのせて行けるをりから、風徐に來りて、椎の花繽紛として馬背をうつとなり。

【つくづく】 念を入れての意。(つらつら) 【ただ中に】 まんなかに。 【畫の中よりぞ現れたる】 畫の如き景の中からあらはれて來たの意。

【青嵐】 メイラン 青みたる山氣を云ふ。 【慇懃に】 インギン ていねいに。

【あやどる】 あちらこちらに程よくまといつける。 【このわたりの畑】 この近邊の畑の意。 【つはもの共】 軍兵共の意。

【夢の名残】 見はてぬ夢の残りをしきを云ふ語。

【そぞろに古を偲ぶ言葉のはし】 何故ともなく、懐古の情を語る詞の端なり。

【旅枕】 タビマクラ 旅宿の意。 【雨の脚に追ひつかれ】 雨にふりつけられること。

【折からの句】 折角の本曾の旅路ををりから五月雨のために、ながめを妨げられたといへるなり。(をりからは恰も其の時になどいふ意なり。)

【旅亭】 リヨテイ はたごやのことなり。 【あはひあはひ】 アヒマアヒマ 間間の意。

【何げなく】 何心なく。 【蒸し重りたる苔】 はえたる上に又はえること。(重り生ず。)

【ささやか】 小さな。 【ひやひや】 危き時に、あやぶみおそるゝ様にいふ語。

【強くもえ踏まず】 きつくはふみ得なかつた。